

福岡市南区

野間 B 遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第211集

1989

福岡市教育委員会

福岡市南区

野間B遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第211集



遺跡名	野間B遺跡 1次調査	調査番号	8708	遺跡略号	NOB-1
所在地	福岡市南区向野2丁目238外	開発面積	1477m ²	調査対象面積	500m ²
開発者	有限会社 奥ビル	調査実施面積	500m ²	調査期間	1987(26日間) 5/29~7/20
遺跡名	野間B遺跡 2次調査	調査番号	8731	遺跡略号	NOB-2
所在地	福岡市南区向野2丁目237	開発面積	1538m ²	調査対象面積	340m ²
開発者	高木松男	調査実施面積	340m ²	調査期間	1987(22日間) 10/3~10/31

消えざる野間日邊



序

福岡市は、市制百周年を迎えて、アジアの拠点都市として、ますます発展しつつあります。

市街地は、周辺部に拡大する一方、中心部においては、快適な生活空間を目指して再開発が進められています。

野間B遺跡は、民間の開発事業で消滅することになり、福岡市教育委員会の受託事業として発掘調査を実施しました。

この結果、弥生時代の竪穴住居跡、古墳時代の円墳2基などの遺構が検出され、この地域の歴史を知る上で重要な成果を得ることができました。

本書の作成にあたり、発掘調査から整理作業に至るまで多くの方々のご協力をいただきました。心から感謝の意を表します。

本書が埋蔵文化財の理解と認識を深める一助となることを願うとともに、研究資料として広く活用いただければ幸いです。

平成元年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 佐藤善郎

目次

		実測図	写真
第1章 はじめに	1. 発掘調査に至るまで 2. 発掘調査の組織と構成 3. 周辺の遺跡 1~5		7 遺跡遠景 6 高宮八幡ご神体
第2章 第1次調査の記録	1. 発掘調査の概要と経過 2. 遺構と遺物 6		7~9 作業風景
1号墳 墳丘	7~10 	10 地形図 11 墳丘測量図	12・13 全景 14・15 盛土
埋葬部 墓道		17 実測図 	16 全形 18 墓道

集石 <i>12・13</i>	20 須恵器 耳環 鉄鉢 21 瓦	19 集石
塗丘祭祀 1号土器群 <i>14～18</i>	22 坯蓋 24 坯蓋 26 坯身、壺 29 有蓋長頸脚付壺 32 大甕	23 坯蓋 25 坯身 27・28 出土状況 30 有蓋長頸脚付壺 31 大甕、坯
2号土器群 <i>19～22</i>	33 盛土土層 35 坯蓋（ヘラ記号） 37 坯身（ヘラ記号） 39 坯身	34 出土状況 36 坯蓋 38 坯身 40 坯身
埋亮 <i>23</i> 野間1号埴出土の 赤色顔料について (福岡市埋蔵文化財センター) 本田 光子 宮内庁正食院事務所 成瀬 正和 <i>24・25</i>	41 出土状況 44 壺	42・43 出土状況 45 壺
その他の遺物 <i>26～30</i>	48 須恵器 坯蓋、坯身 50 土師器 壺 52 弥生土器 壺 54 弥生土器 壺、壺 56 弥生土器 底部、器台 57 石器 猫捕具、砥石	49 坯蓋、坯身 51 土師器 壺 53 弥生土器出土状況 55 弥生土器

第3章 第2次調査の記録			
1. 発掘調査の概要と経過	31		58 発掘調査前 59 発掘作業 60 壁穴住居跡
2. 遺構と遺物		61 現況図 64 墳丘図 68 埋葬部 71 溝	62 全景 63 全景 65 全景 66 盛土 67 墳裾 69 埋葬部 70 墓道 72 溝
2号墳 墳丘 32~35 埋葬部 36 墓道 37 埴輪下の溝 38			
出土遺物 39~44		73 須恵器 坯 76 須恵器 豆 78 須恵器 肩 80 須恵器 脚付壺 腹台 81 須恵器 豆 83 管玉 紡錘車 鉄製品	74 坯蓋 75 坯身 77 豆 79 肩 82 豆 84 管玉 紡錘車 鉄製品
壁穴住居跡 45~48 		86 平面図 89 土器 黒曜石 石鏃 凹石 90 石劍	85 中央炉 87 全景 88 床面 91 石劍
その他の遺物 49~50		93 挖器、砾石、穂摘貝	
第4章 おわりに 51~54		94 調査区	95 3次調査

要約と凡例

1. 福岡市南区野2丁目にある野間古遺跡は、マンション建設と土取り工事によって破壊消滅することになり、福岡市教育委員会は、1987年の5月と10月の2回にわたりて発掘調査を実施した。本書は、この時の記録報告である。
2. 1次調査の対象地は、マンション建設地の1477m²である。当該地周辺は、「福岡市文化財地図」(中部・南部)では、野間古遺跡と記名登録されているが、遺跡の内容は、雑木林となっているために明らかではなかった。現地踏査の結果、円墳1基が発見された。さらに隣地1538m²内に、もう1基の内墳があることが確認でき、それぞれ野間1号墳、野間2号墳と呼ぶことにした。
3. 1次調査の1号墳は、周溝を持つ円墳で、周溝を含めた直径は13.5m×15.5m、墳丘の高さは1.4mを測る。墳丘中央の埋葬部は、完全に破壊され、今その形状を知ることができないが、南西側に長さ2.8mの墓道が付いていることから、南西側に開口する横穴式小石室と推測される。墓道中心軸の方向は、N-35°Eを示す。
4. 遺物は、墓道入口の可倒から須恵器の杯蓋、杯身、脚付壺、大甕などがまとまって出土した。これらは、墳丘祭祀の供献土器と思われ、6世紀後半の時期が考えられる。
5. 周溝には、赤色顔料を充溝した土師器の甕が埋めこまれていた。この赤色顔料が何に使用され、どのような目的で埋置されたのか明らかではないが、古墳造営、葬送、あるいは祭祀などを知る一つの手掛りになるであろう。赤色顔料については、宮内庁正倉院事務所の成瀬正和氏と福岡市埋蔵文化財センターの本田光子さんに分析を依頼し、その結果を第2章に執筆していただいた。
6. 2次調査の2号墳は、一部に溝が掘られており、墳丘は1号墳よりやや大きく、径15.5m×14.0m、高さは1.25mを測る。同じように完全に破壊された埋葬部には、長さ3.0mの墓道が南北方向に付いている。断定はできないが横穴式横口式の埋葬部を想定した。
7. 遺物のほとんどは、墓道前面より出土した。須恵器の杯蓋、杯身、器台、甕などである。これらの遺物から6世紀初頭前後の時期が考えられる。
8. 2号墳の直下から弥生時代中期前半頃の円形竪穴住居跡が検出された。1988年5月には、北東隣接地でも3次発掘調査が実施され、ほぼ同時期の竪穴住居跡、埋立柱建物跡が検出されている。計3回の調査によって、野間古遺跡の内容が明らかになつたが、その構性として遺跡は永遠に姿を消してしまつた。
9. 事前協議、発掘作業、遺物整理、そして報告書作成に至るまでには、多くの方々のご協力があつた。特に遺物実測を分担してくれた田中克子、永井昭子、池田祐司、小川泰樹、荻村昇二氏の努力が大であったことを、ここに銘記して感謝の意とする。
10. 図と写真は、できる限り同一ページ、あるいは見開きページに配し、縮尺を統一している。
11. 野間古遺跡1、2次の出土遺物と写真、実測図などの記録類のすべては、福岡市埋蔵文化財センターに所蔵され、一般公開される予定である。
12. 本書は、常松幹雄と力武卓治が、協議分担して作成した。

第1章 はじめに

1. 発掘調査に至るまで

福岡市の中心、天神より西鉄大牟田線の電車に乗ると、薬院、平尾、高宮駅までは、ビルの谷間を走るが、高宮駅を過ぎたころより、車窓の右手前方に標高30前後の低い丘陵が展開してくる。この丘陵上は、すでに宅地開発が進み、昭和初期の地図に比べると想像出来ない程に地形が変化している。丘陵の東側斜面は急斜面のために、どうにか開発から免れ、照葉樹の森がよく残っていた。線路沿いに緑の首筋りのように南に続くこの森は、潤いのある街の景観を作り、電車の乗客には安らぎを与えていた。ところが最近の異状な開発行為は、最後に残されていたこの斜面にも及ぶことになり、特に天神に近い高宮、大橋地区は、緑の森に代わって大型マンションが林立するようになった。野間B遺跡もその例外ではない。

有限会社奥ビルより、この地にマンション建設の申請が出された。これを受けて現地踏査を行なったところ円墳1基を確認した。このため、保存を前提に奥ビルと協議を重ねたが、工事工法上の理由で保存は困難という結論に達し、やむなく発掘調査を実施し、記録保存することになった。



1 森が切り開かれた野間古墳群（東から）
左は純真女子短大寮、右は東和大学

2. 発掘調査の組織と構成

調査委託 1次調査 奥ビル

2次調査 高木松男

調査主体 福岡市教育委員会文化部埋蔵文化財課

柳田純孝（課長） 飛高憲雄（第2係長） 松延好文（事務担当）

小林義彦 下村智（事前審査担当）

力武卓治 常松幹雄（発掘調査担当）

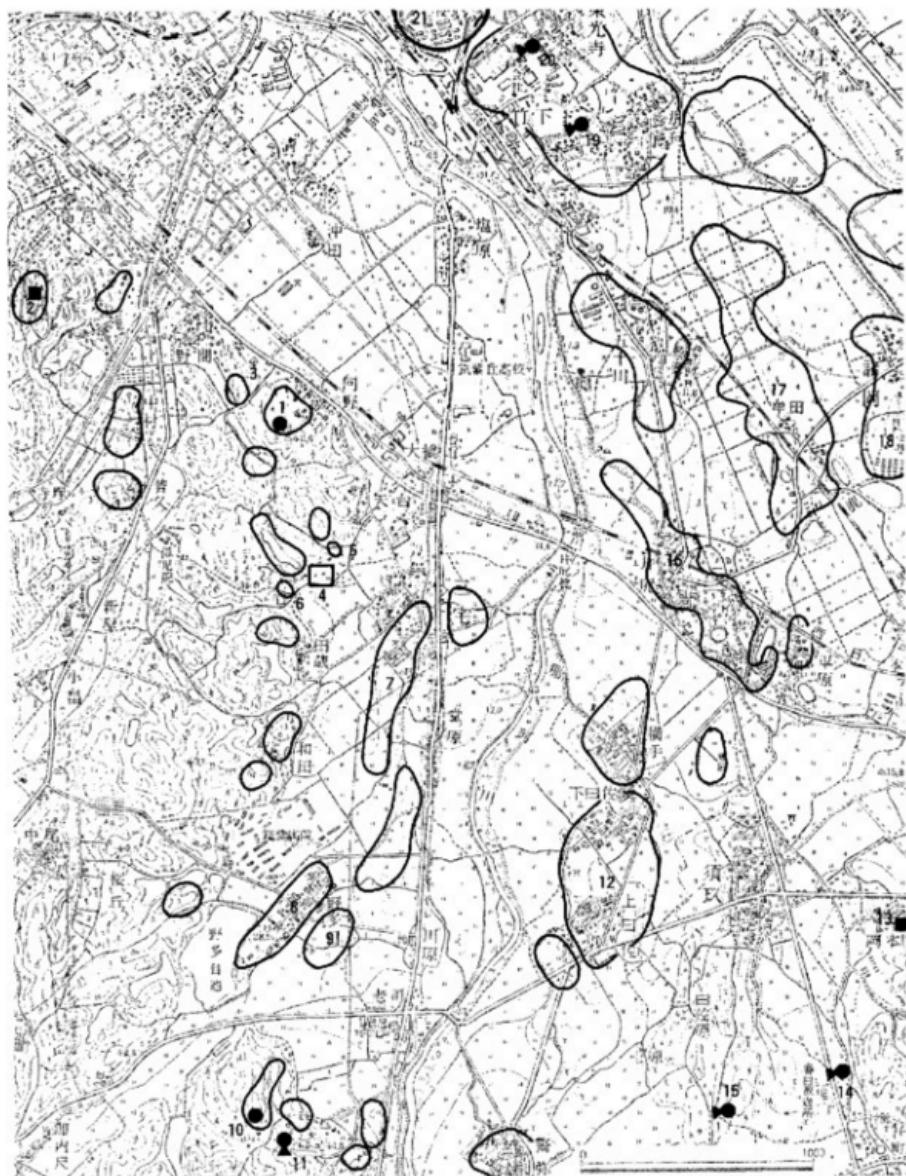
発掘作業員 山崎光一 柴田松藏 藤吉浩次 曽根崎昭子 村崎祐子 桑野正子 黒木静子

関加代子 江越初代 野口ミヨ 井手口美代子 浜地フサエ 近藤澄江

村田敦子 門司弘子 衛藤富子

整理補助員 田中克子 池田由美 澄良子 池田祐司 陳雅文 貝原純子 永瀬昭子

小川泰樹 萩村昇二 黒岩三紀子 結城澄子 柴藤理恵 北山陽子



2 野間B遺跡と周辺の遺跡 (縮尺1/25,000)

- | | | |
|------------------|------------|------------|
| 1 野間B遺跡 | 8 野多目A遺跡群 | 15 下白水大塚古墳 |
| 2 高宮A遺跡群 (高宮八幡宮) | 9 野多目C遺跡群 | 16 井尻B遺跡群 |
| 3 野間A遺跡 | 10 卿内尺古墳 | 17 謙間A遺跡群 |
| 4 三宅庵寺遺跡 | 11 老司古墳 | 18 謙間B遺跡群 |
| 5 三宅瓦窯跡 | 12 丹佐遺跡群 | 19 那珂八幡古墳 |
| 6 三宅岩野瓦窯跡 | 13 須久間本遺跡群 | 20 刻塚古墳 |
| 7 和田A遺跡群 | 14 竹ヶ本古墳 | 21 比恵遺跡群 |



3 遺跡周辺の地形図（昭和初期 縮尺1/5,000）

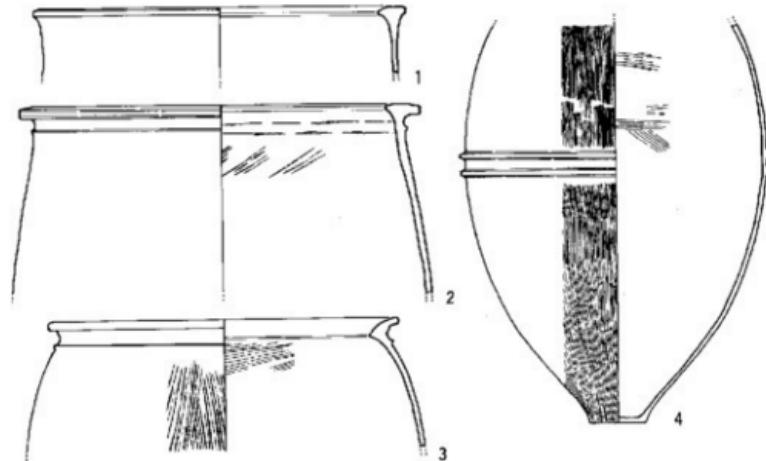


4 遺跡周辺の地形図（現在 縮尺1/5,000）

3と4は、遺跡周辺の同じ縮尺図です。地形は、わずか60年間に
こんなに変つてしましました。とても同じ場所とは見えません。

3. 野間B遺跡の位置と周辺の遺跡

野間B遺跡は、標高30m前後の丘陵上に位置している。この丘陵は、那珂川町との境にある片桐山（標高292m）より北東方向に派生した丘陵の一つである。丘陵の東側には、那珂川と御笠川が流れ、肥沃な福岡平野を形成している。この両河川流域には、「弥生銀座」と呼ばれるように、板付遺跡、須玖岡本遺跡をはじめとする我が国でも有数の遺跡が点存している。しかし、野間B遺跡の周辺に限って見ると、これまで発掘調査された遺跡は、わずかに南区大橋字古野にある三宅廃寺遺跡の一か所を数えるにすぎない。開発の件数とその速度は、埋蔵文化財行政の対応を待たずに、この数年で急激に進んでしまった。決してこの周辺に遺跡が少ないと言うわけではない。埋蔵文化財行政の立ち遅れが指摘される地域である。したがって、東京国立博物館が所蔵する野間門の浦出土の中細銅矛や筑紫丘高校に保管してある櫛棺などは、この地が『奴國』を構成する重要な地域であったことを十分に推測させる資料であるが、不時発見のために出土地点や出土遺構が明らかでなく、歴史資料としての価値は半減している。なかでも高宮八幡宮のご神体である鎧型は、このような状況の象徴でもある。このご神体については、青柳種信の『筑前國統風土記拾遺』に記されており、これまで東亜考古学の『対馬』に拓影が掲載されているだけであった。今回、志賀正信宮司、氏子の皆さんのご理解で初めて公開された。ご神体は6体あり、うち1体が砥石で、残りは広形銅矛と銅戈の鎧型である。写真のように質、量とも見る者を圧倒する。



5 筑紫丘高校保管の櫛棺実測図（縮尺 1と3は1/10、2と4は1/12）

口径 1-54cm 2-82cm 3-60cm 4 桿部最大径54cm

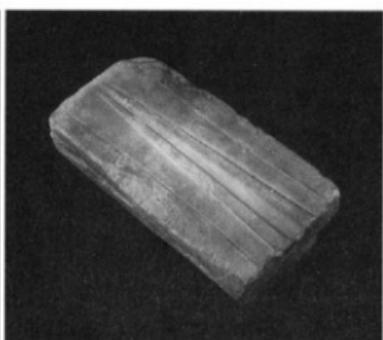
今回、発掘と周辺の調査によって多くの成果があったが、市街化が進んだこの地域にとって、本来一定の広がりの中で人間活動の証として理解されるべき遺跡と遺物が、單に一つの点、物として語られるという限界があり、埋蔵文化財行政に携わる者として大いに反省しなければいけない。



1 広形銅戈錫型（長さ31.4cm）



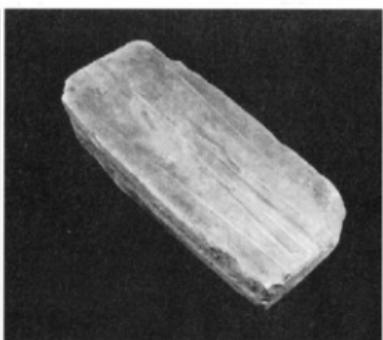
2 広形銅矛錫型（長さ22.2cm）



3 広形銅矛錫型（長さ30.5cm）



4 広形銅矛錫型（長さ37.2cm）



5 広形銅矛錫型（長さ39.5cm）

6 高宮八幡宮ご神体

第2章 第1次調査の記録

1. 発掘調査の概要と経過

有限会社奥ビルが計画したマンション建設予定地は、南区向野2丁目238,239の1477m²である。この地は、「福岡市文化財分布地図」(中部・南部)に登録記載されている野間B遺跡という周知の遺跡であったことから、1987年1月29日に現地踏査を行った。対象地は丘陵の尾根とその東側斜面からなり、市街地には珍しく照葉樹の大木が繁っている。現在は解除されているが、かつては塩原区画整理事業地内の緑地保全地区の候補にもなっていたらしく、森の中にはいろんな昆虫たちが生息し、野鳥の休息林になっていた。

現地踏査の結果は、前述したように円墳1基（1号墳）が新たに発見された。この古墳は、直径12~14mで、1.5mほどの盛土がある。墳丘中央部は斜面側に向かって窪んでいることからすでに盗掘された横穴式石室と推測された。隣地には、もう1基の円墳（2号墳）があり、遺物の表探しはできなかったが、6~7世紀頃の群集墳の一つであることを奥ビルに連絡した。

発掘調査は、委託契約を結んだ後、1987年5月29日より20日間の予定で着手した。

1号墳は、墳丘の西半分が隣地に股がっており、当初は東半分のみの予定であったが、造成時の安全対策の問題が生じ、隣地側も連続して調査することになった。のべ26日の期間をかけて、7月20日に無事終了した。



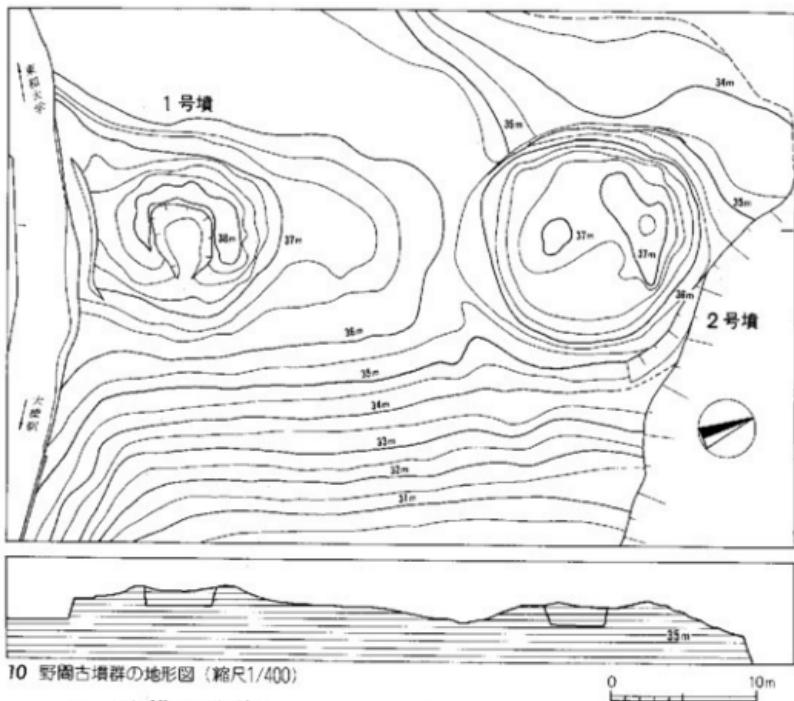
7 1号墳発掘作業開始



8 発掘作業風景



9 発掘作業員の皆さん



10 野間古墳群の地形図（縮尺1/400）

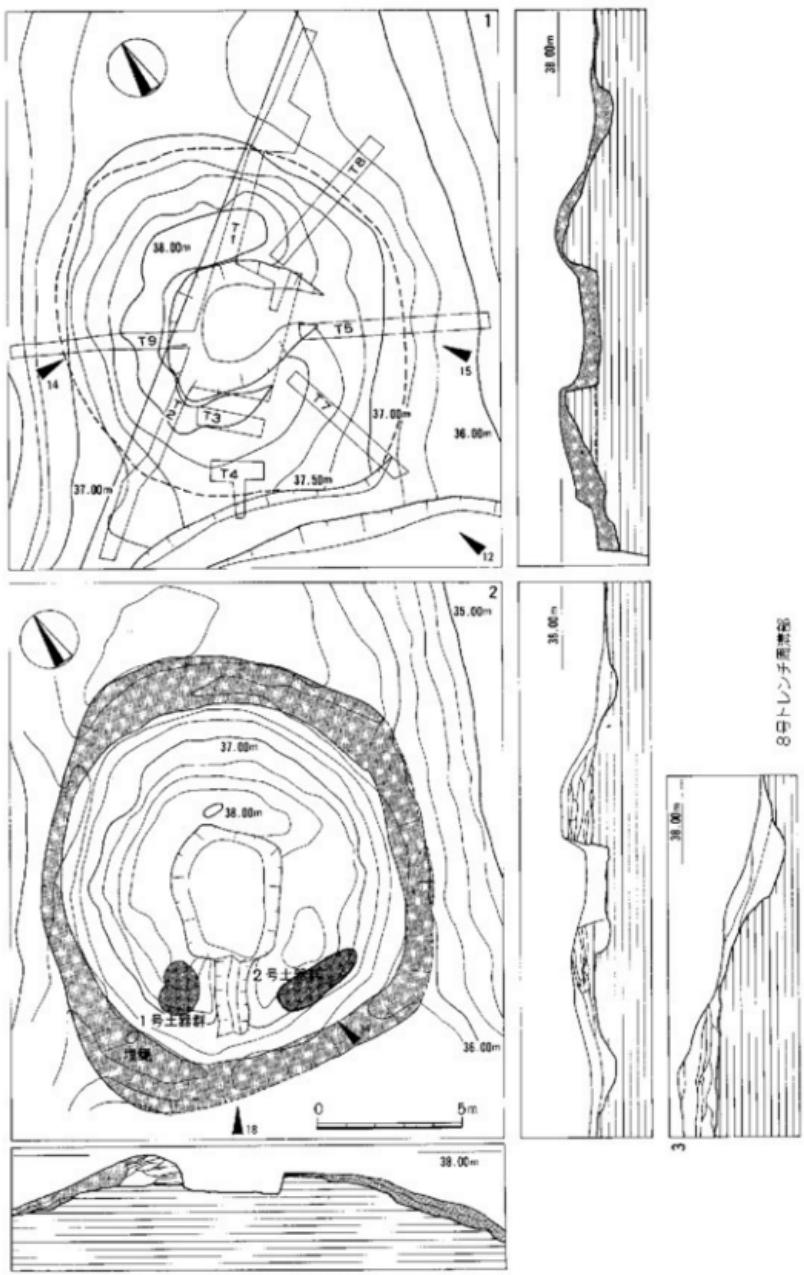
2. 遺構と遺物

墳丘と周溝 2基の古墳は、北に伸びる丘陵尾根上に位置する。この丘陵の西側には、小さな谷を挟んで福田学園のキャンパスがあり、東側は道路で切斷され崖となっている。現在の尾根は長さ約120m、基部の幅約80mが残るにすぎないが、本来の地形は、純真幼稚園付近を最高位として平野部に向けて派生する尾根の一つと思われる。いまは、独立丘となっている近くの地蔵神社の社も別の尾根の先端にあったものである。

1号墳の墳丘は、樹木伐開後の見かけの大きさは、直径12~14m、高さ1.5mである。発掘作業は、まず隣地との境界線に沿って1、2号トレンチを設定し、埋葬部の確認と盛土の状況を観察した。

1号トレンチの北端部では、周溝と思われる溝状の浅い落ち込みが見られたことから、中心より放射状に4、5、6、7号のトレンチを設けた。これらのトレンチ調査から、盛土の残存状況はきわめて悪いものの、地山整形と周溝を確認できたので、二次堆積土を取り除いて、全体を検出するようにした。

8 1号墳 墳丘



11 1号墳の墳丘測量図（縮尺1/200 1-トレンチ配置図 2-墳丘図）

8号トレンチ断面図



▲12 1号墳全景（南から）
現表土を除去した状況
左の凹面に対応する。



▲13 1号墳全景（南西から）
覆土を除去し、本来の
墳丘を出した状況。

墳丘盛土は、中心部は旧表土上に暗黄色土、暗灰色土、暗黄灰色土を交互に販築しているが、あまり丁寧な作業とは言えない。墳壠部の境は盛土の流失が激しく断定できないが、花崗岩バラン土の地山を整形した可能性が強い。墳丘の大きさは、周溝まで含めると長径15.5m、短径13.5mである。なお、9号トレンチでは、盛土が大きく削り取られ、その後に別の土が貼り付けられたような堆積の仕方をしている。

周溝は、尾根線上にある南北側によく残っている。周溝上面で幅140~160cm、断面はゆるやかな逆台形で深さは20~40cmを測る。斜面側の東西はやや落ち込みが不明瞭だが、地山の変換点が認められることから、一周する意図があったと思われる。ただ墳丘が正円に近いのに対して周溝が南北に長い楕円形を呈しているのは、尾根という占地に制限された結果であろう。



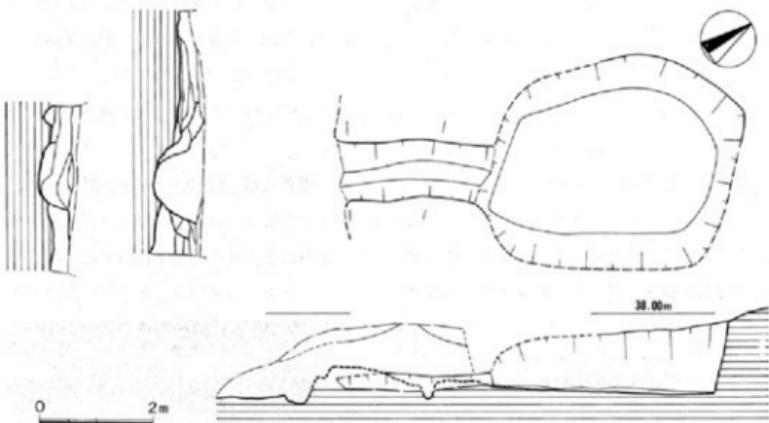
14 9号トレンチ盛土（南西から）



15 5号トレンチ盛土（南東から）



16 埋葬部全景（南西から） 旗面の中央に重石が見られる。



17 盗掘坑 墓道実測図（縮尺1/100）

埋葬部と墓道 埋葬部は、当初墳頂の陥没状況から見て、東に開口する横穴式石室と予想された。しかし、陥没部を精査しても石室の構築に使用されたと思われる石材は、一つも検出されなかった。各トレンチの土層観察では、版築土層に対してほぼ垂直に掘り込まれた線があり、



18 墓道（南西から）前方に集石が見える。

これを埋葬部掘り方と考えたが、裏込め部の土層がないなど不自然であった。地底には、後述する瓦を含む集石があることなどから、副葬遺物ばかりではなく、石材の抜き取りを主目的とした盜掘のために、埋葬部掘り方よりも大きい穴が掘られたと判断した。盜掘坑は、長軸4.5m、短軸3.8m。地底は、わずかに奥に傾いている。

墓道は、この盜掘坑の南西側に付いている。現在長さ2.8m、幅約1mで、中ほどに小さなピットが1個見られる。断面はゆるやかな鍋底状で、底面はほぼ水平である。3、4号トレンチの土層には、2回以上の掘り込みが認められるが、追葬によるものか、あるいは盜掘を示すものかは区別できない。したがって、埋葬部の形状を知る直接の材料はないが、盜掘坑より小さかったこと、墓道が付くことなどから、ここでは南西開口の小石室と想定するにとどめる。

集 石 盗掘によって、埋葬部の遺物は原位置ではない。ただ面白いことに盗掘場のほぼ中央の地上に10数個の角礫が円形に集められている。内側は焼土と灰があり、この間からは、須恵器片(1・2)、耳環(5・6)や瓦片(1~3)が出土した。盗掘の際、焚き火をして暖をとったのか、あるいは盗掘のお祓いでもしたのであろうか。

遺 物 埋葬部の盗掘場から出土した遺物は、きわめて少なく、また各時期のものが混存している。

須恵器 (1~3) 1、2は壺蓋、3は高环の环部で、いずれも小破片である。1は口径14.2cm、器高4.3cm。2は口径14.4cm、器高3.4cmを測る。1、2を比較すると、1の口縁部の開きが弱く、口縁端は丸みがあるが、内側には小さな段をつくる。天井部のヘラ削りは1/2を占め、丸みがある。2も口縁部と天井部との境は、わずかながら突出している。全体的に扁平なつくりである。どちらも天井部内面に当



19 集石 (東から)

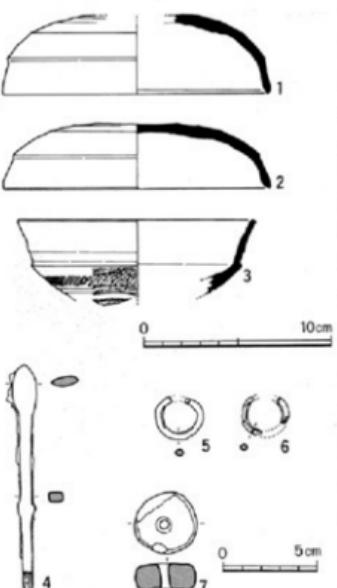
て具痕が見られる。3は、無蓋高环の环部で、脚部はない。环部の中位ににぶい稜がつき、わずかに外湾する口縁部がつく。この稜の下部には、櫛描き列点文を巡らせている。口径12.6cm。

鐵鏃 (4) 鐵鏃は、盗掘場の底面で數本出土したが、細片のために固化できたのは4の長頭鏃のみである。
のちづけ
範被の一部を欠き、銹化が激しい。現在長11.1cm。範被と茎の境には棘状突起がわずかに認められる。

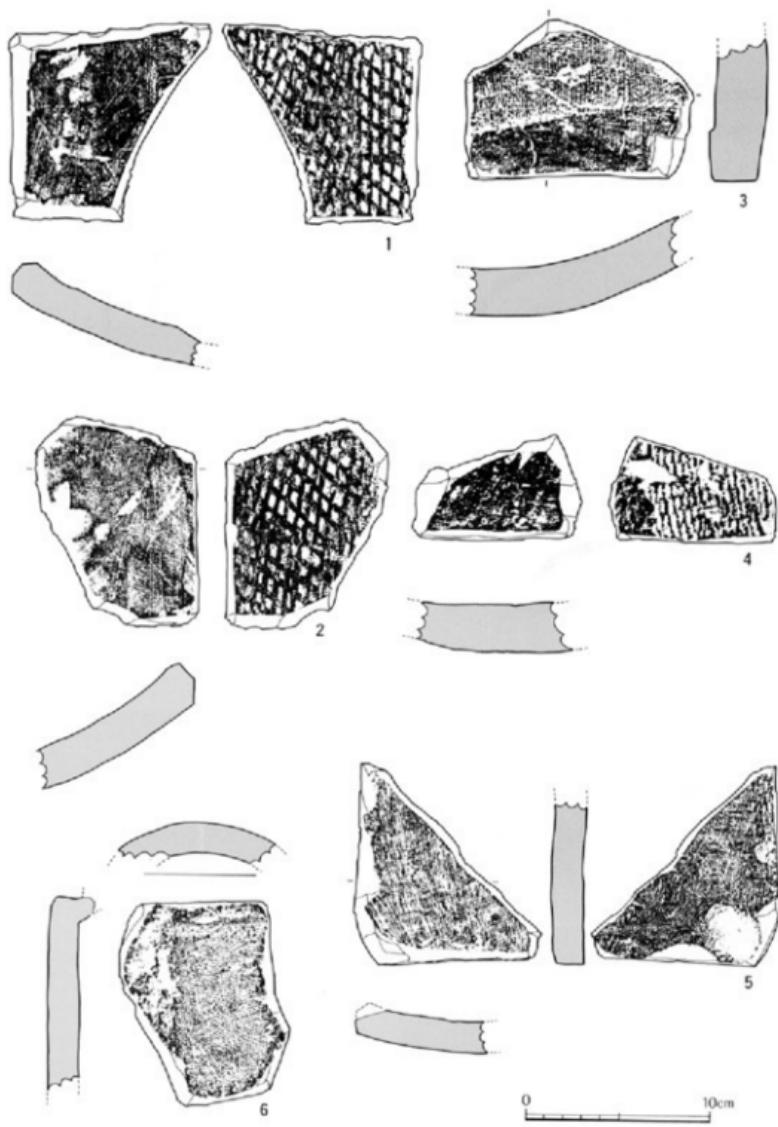
耳環 (5・6) 2個とも腐蝕が進み難くなっている。5は、切れ目を破損しているが完形に近い。直径2.3×2.6cm。どちらも銅芯金張りである。これらは対になっていたのであろう。

筋鎌車 (7) 土製で、盗掘場の埋土より出土した。直径3.3×3.4cm。きめの粗い胎土で焼成もよくない。

瓦 (1~6) 集石と墳丘より出土したものとここにまとめた。南約2kmには三宅瓦窯跡や三宅岩野瓦窯跡などが知られており、さらにいくつかの瓦窯が丘陵斜面を利用して営まれていたのであろう。



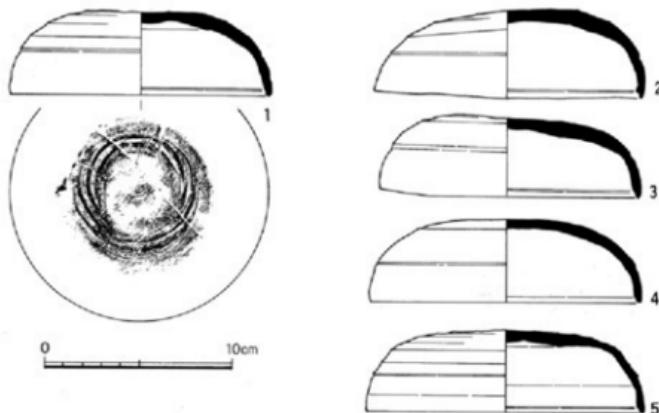
20 盗掘場出土の遺物実測図 (縮尺1/3)



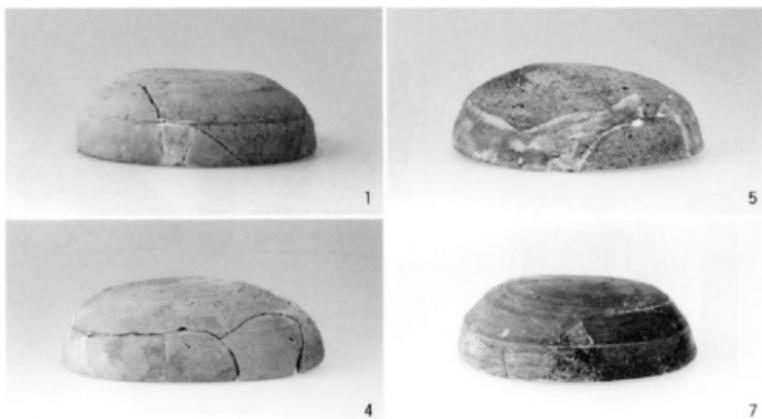
21 1号墳出土の遺物実測図 (縮尺1/3)

墳丘祭祀 遺物の出土は、墓道の両側に集中している。これらは、初葬、追葬時の供獻、あるいは埋葬時以外の墓前祭祀の結果と考えられるがどれに当るのかは断定できないので、ここでは墳丘祭祀という言葉を用い、墓道西側の2号トレンチで検出した土器群を1号土器群、墓道東側の土器群を2号土器群と呼ぶ。

1号土器群は、墓道中心より西へ約2.5mに位置している。樹根に巻きこまれ全体の出土状況が正確につかめない。挿図28のように、23の有蓋長頭脚付壺の破片は、壺24の中から出土して



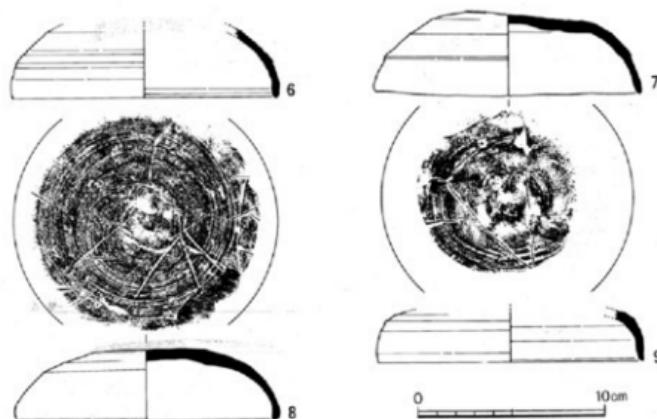
22 1号土器群出土の遺物実測図（縮尺1/3）



23 1号土器群出土の遺物

おり、おそらくはこの場所で破壊されたのであろう。コンテナ5箱分が出土したが、岡化できたのは、23点である。土師器は出土していない。

須恵器 坏蓋（1～9） 9点とも完形品はない。口縁端部内面にわずかに段をもつもの（1～5）と丸くおさめるもの（6～9）とに分けられる。1は天井部が丸く、口縁との境にぶい稜がある。内面に当て具痕が残る。口径13.6cm。8と9は口縁部と天井部との境がなくなり、天井部は丸みがない。8の天井部にはヘラ記号が見られる。どれもつくりは丁寧でない。



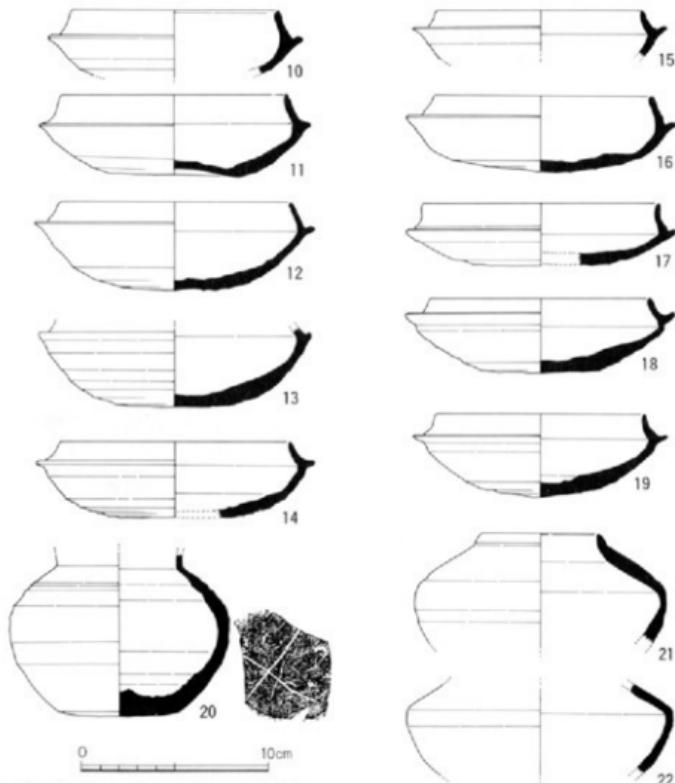
24 1号土器群出土の遺物実測図（縮尺1/3）



25 1号土器群出土の遺物

环身 (10~19) 図示した10点の环身は、受け部の突出が小さく、立ち上りは内傾して、端部は丸くおさめている。また底部は扁平で、ヘラ削りは1/3弱に施すという共通点がある。10は口径10.9cm、立ち上りは直線的に内傾する。11は口径12.2cm、焼成時に底が変形している。12は丸みのある底部に、内傾の強い立ち上りが付く。口径12.6cm、器高4.7cm。13の受け部は上方に小さく突出し、他と異なる。底部も丸みがあり深い。17の内傾する立ち上り部は、その中程で微妙に屈曲して直立する。口径12.6cmに対し、器高は3.4cmと扁平な器形となっている。19も同じような立ち上りで、端部は細くおさめている。

短頸壺 (20) 頚部より上部を欠いているために、全形を知りえないが、小型の短頸壺と判断した。胴上半部には灰を被っている。調整はきわめて粗雑であり、焼成もよくない。平底ぎみの底部にはヘラ記号がある。



26 1号土器群出土の遺物実測図（縮尺1/3）



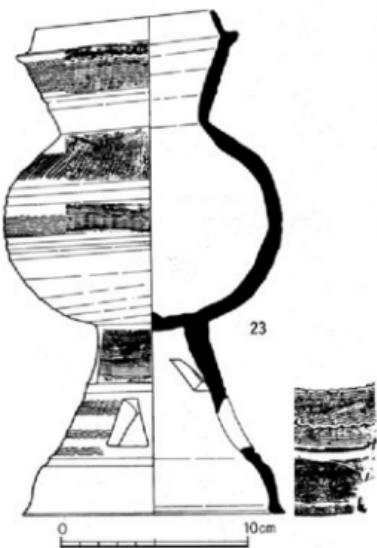
27 遺物検出作業



28 有蓋長頸脚付壺の出土状況

無頸壺 (21、22) 2点とも胴部の中位よりやや上で反転し、張りの強い肩部をつくる。上半部は直線的に内傾し、わずかに屈曲してそのまま口縁部となっている。21は口径 6.4 cm。丁寧な調整が施されている。22は、さらに調整が丁寧で、器壁も薄いつくりである。どちらも蓋が付くのであろう。

有蓋長頸脚付壺 (23) 破片が足りない部分もあるが、ほぼ完形品に近く接合復原できた。胎土は1mm 大の砂粒を含んでおり、外面は灰色を呈する。焼成は良好である。脚部には浅い沈線が巡り、3段に分かれれる。上方の2段には櫛描き波状文を施した後に、3か所計6個の台形透しを千鳥に開けている。壺の下半部はヘラ削り。上半部は浅い沈線を間にして櫛描き列点文と櫛描き波状文を巡らしている。頭部は



29 有蓋長頸脚付壺の実測図（縮尺1/3）



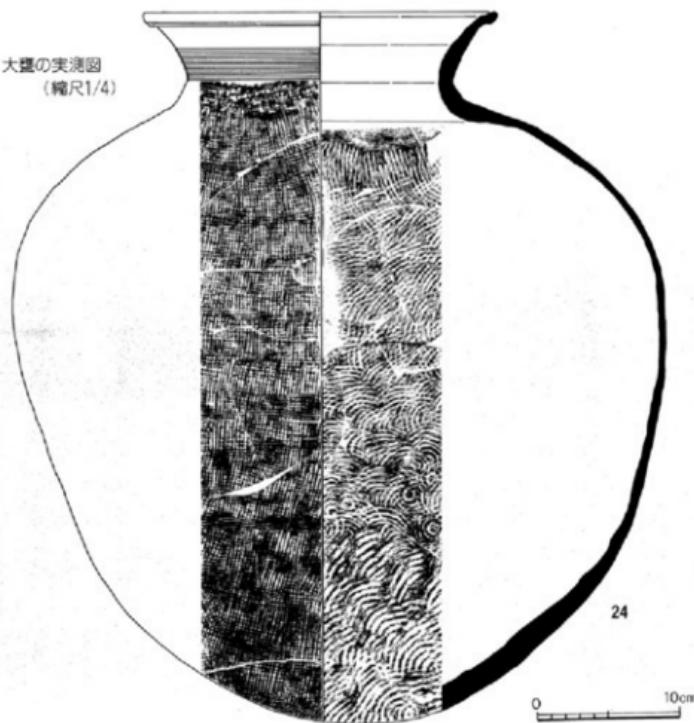
30 有蓋長頸脚付壺

直線的に外反し、坯身と同じような受け部をつくる。蓋と思われる破片は見出せなかった。口径 9.4 cm、壺胴部最大径 14.8 cm、脚裾径 14 cm、器高 26.9 cm を測る。

甕 (24) 脇部最大径は、やや上位にあるが、肩は張らない。外反する口縁部は端部でさらに聞く。脇部外面は格子叩きの後にカキ目を施す。頭部はカキ目の後に横ナデを加える。口径 25.2 cm、脇部最大径 46.2 cm、器高 50.8 cm。

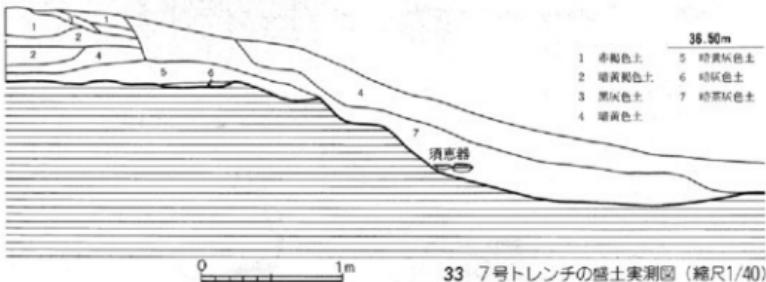


31 墳丘祭祀の土器

32 大甕の実測図
(縮尺1/4)

2号土器群は、墓道中心より東側に約1.8mから4.5m付近にかけて検出された。樹根と7号トレンチの掘り下げで原位置を動かしたものが多いが、下の写真のように原位置を留める7個の环は、墳丘36.75mの等高線上に孤状に並んでいる。これらの环は、完形品が多い。8個の环蓋と10個の环身を図化したが、割れているものでも、ほとんど接合できることから、破碎された1号土器群とは異なり、整然と墳丘上に並べ置いたものと考えられる。ただ环蓋は环身に被せられていない。なお2号土器群は、环以外の器種は出土していない。

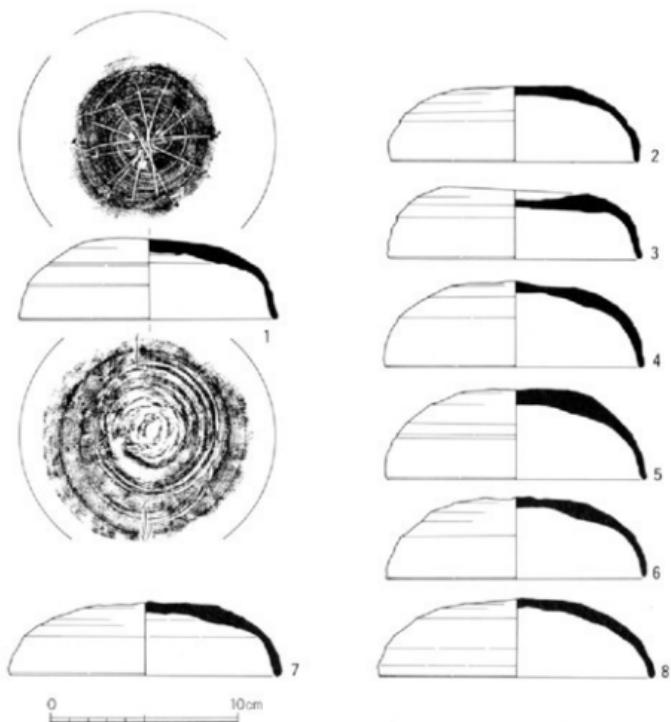
环蓋（1～8） 1号土器群の环蓋に比べると、口縁端内面の段が失なわれ、端部は丸くおさめている。また口縁部と天井部との境も不明瞭で、やや後出的な特徴を持っている。



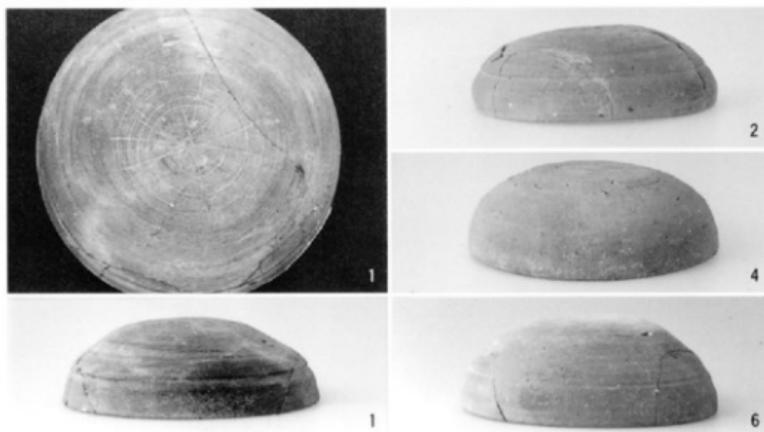
33 7号トレンチの盛土実測図（縮尺1/40）



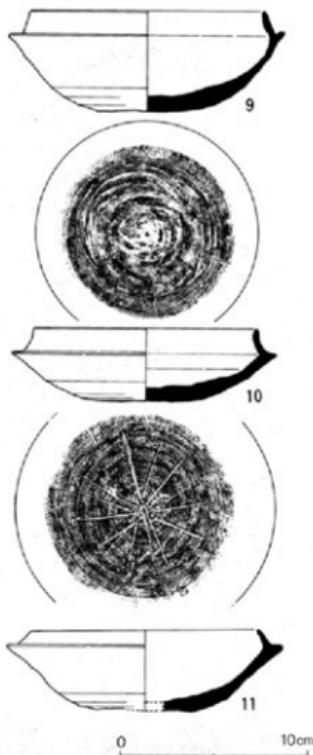
34 2号土器群の出土状況（南から）



35 2号土器群出土の遺物実測図（縮尺1/3）

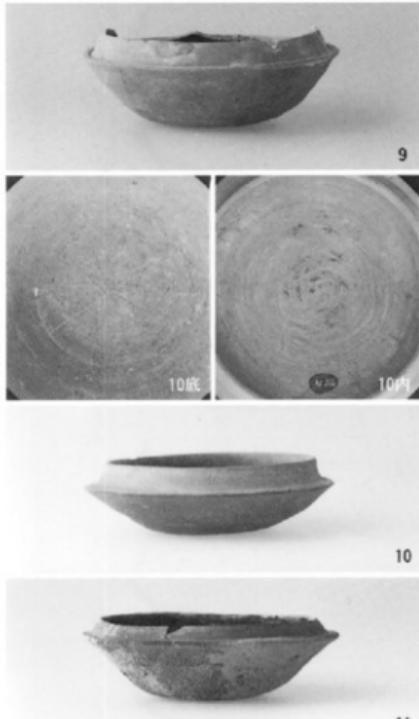


36 2号土器群出土の遺物

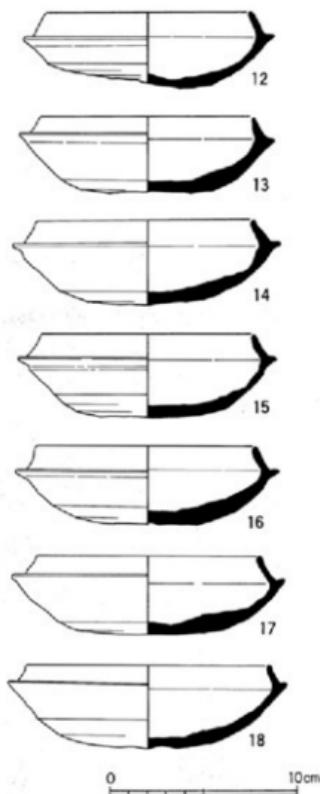


37 2号土器群出土の遺物実測図 (縮尺1/3)

1は口径13.8cm、器高4.3cm。きめの細かい胎土が用いられ、焼成もよく堅緻である。内外面とも黒灰色を呈する。天井部と口縁部とは浅い沈線で分けられる。天井部のヘラ削りは1/2弱で、中心に8本線を交叉したヘラ記号をついている。内面には當て具痕が残り、わずかにナデ消しが行なわれている。ロクロ回転は時計まわり。2の内面も同じように同心円状の當て具痕が残る。口縁部は外に開かないで丸みがある。天井部のヘラ削りは2/3に及ぶ。3は口径13.4cmで、天井部は焼成時に変形している。4は器面に砂粒が露出しており、調整もきわめて悪い。内面の當て具痕にはナデ消しが加えられている。5、6の天井部は丸みがあり半球状に近い。5は口径14cm、器高4.8cmを測る。天井部のヘラ削りは1/3強で、きわめて粗雑である。口縁端内面には段はないが、細い沈線を巡らしている。6は天井部と口縁部との境がほとんど区別がつかない。7、8も同じようなつくりの口縁部である。器高は4cm前後と低くなっている。



38 2号土器群出土の遺物



0 10cm

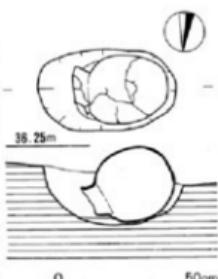
39 2号土器群出土の遺物実測図(縮尺1/3)



40 2号土器群出土の遺物

坪身 (9~18) 9は深みのある底部に、小さな受け部がつく。内傾する立ち上りは、直線的に伸び、端部は丸くおきめる。底部全面に灰を被る。口径12.6cm、器高5.5cm。10は底部外面のヘラ記号と内面の当て具痕の拓影を示した。受け部は、ほぼ水平で、立ち上りは、湾曲しながら伸びる。底部のヘラ削りは1/2で、全体的に丁寧な調整が施されている。11は立ち上りが短かく、内傾が強い。その端部は小さく内側に傾いている。12の立ち上りは、直線的に内傾し、長く伸びる。底部のヘラ削りは逆時計まりである。13は全体的に厚い器壁をつくる。14の立ち上り部は小さく摘み上げて、微妙に湾曲している。15は口径10.8cm、器高4.5cm。底部は平坦となる。16の受け部は長めで、立ち上りは先端まで同じ厚さでつくる。18の立ち上り端部も、小さく摘み上げられている。底部は約1.7cmの幅広いヘラ削りが施されている。

埋甕 この埋甕は、周溝の底面で検出された。その位置は墓道中心線より西へ約3mである。不整橢円形の穴を掘り、甕の口縁部をわずかに下に傾むけ、穴の一方に片寄せて埋置している。口縁部の方向は、埴丘の中心を向いている。甕は口径20.1cm、器高31.8cmで長胴をなす。内面からは多量の赤色顔料が発見された。内面の器壁にも塗ったような赤色顔料の膜が見られる。この甕の時期は、須恵器が示す6世紀後半と同じと考えられる。赤色顔料が何に使用されたかはわからないが、その容器として埋置されたのであろう。



41 埋甕実測図(縮尺1/20)



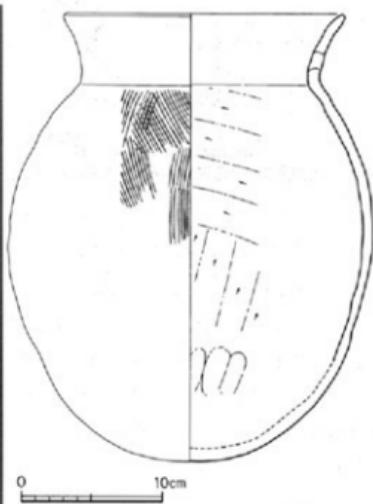
42 埋甕出土状況（北東から）



43 埋甕出土状況（南東から）



44 甕



45 甕の実測図(縮尺1/4)

野間1号墳出土の赤色顔料

福岡市埋蔵文化財センター 本田 光子
宮内庁正倉院事務所 成瀬 正和

野間1号墳の周溝内より出土した土師器の甕の中に入っていた赤色顔料について、光学顕微鏡による観察とX線分析によりその種類を明らかにし、若干の考察を試みた。

試料

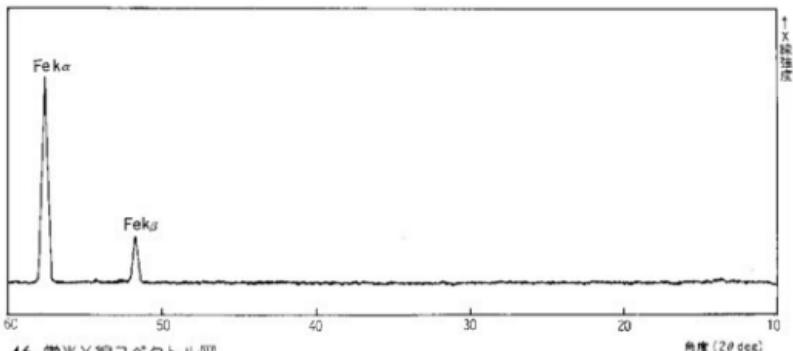
甕内の赤色物には多少の土が混じっていたが、ほとんどが赤色顔料といえる状態であった。その中で特に赤色顔料が凝聚して小塊となっている部分を選んだ。色は赤褐色に近く、鮮かさはないいわゆるベンガラ色である。

顕微鏡観察

当時の赤色顔料としては朱とベンガラが考えられる。これらは独特な粒子の形状を示すため、特に微粒の両者が混在していない限り、光学顕微鏡による検鏡で容易に判断がつく。検鏡は反射光・透過光により40~400倍で行った。本試料はいわゆるベンガラ粒子より成り、朱粒子は含まれていなかった。一口にベンガラといっても、その粒子には様々な形狀があり、この形狀はその製造条件の差を示すものと考えられる。出土ベンガラの場合、パイプ状粒子の存在が注目されているが、本試料中にも少量ではあるが含まれていた。このパイプ状粒子については、古墳の石室等多湿な環境における二次的変化の結果ではないかという実験報告もある。本試料のように、ある程度の期間は開放状態にあったと考えられる場合でもパイプ状粒子が見出されたわけだが、この点についてはいずれにしても今後の資料の蓄積を待たねばならぬだろう。

蛍光X線分析

赤色顔料の主成分元素である鉄Feと水銀Hgの検出を目的として、蛍光X線分析の測定を行った。



46 蛍光X線スペクトル図

た。測定条件は下記の通りである。宮内庁正倉院事務所設置の理学電機工業製蛍光X線装置、X線管球：クロム対陰極、印加電圧：40kV、印加電流：20mA、分光結晶：フッ化リチウム、検出器：シンチレーション計数管、ゴニオメーター走査範囲(2θ)：10°～65°、ゴニオメーター走査速度：2θ4°/分、記録紙速度：40mm/分、フルスケール：2000cps、時定数：0.5秒。蛍光X線分析チャートを第46図に示す。測定の結果、赤色の由来となる元素としては鉄が検出され、水銀は検出されなかった。

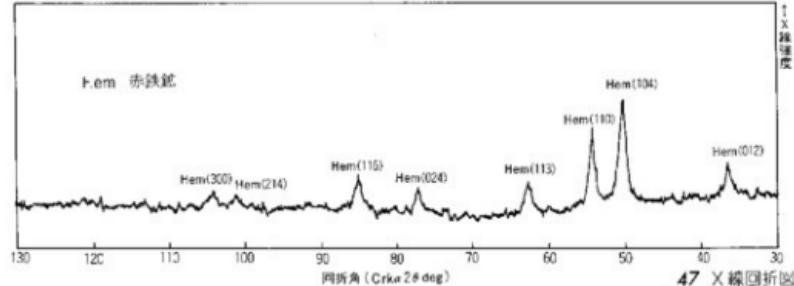
X線回折

赤色の由来となる主成分鉱物である辰砂（硫化水銀HgS）と赤鉄鉱（酸化第二鉄Fe₂O₃）の同定を目的として、X線回折の測定を行った。測定条件は下記の通りである。宮内庁正倉院事務所設置の理学電機㈱製文化財測定用X線回折装置、X線管球：クロム対陰極、フィルター：バナジウム、印加電圧：25kV、印加電流：10mA、検出器：シンチレーション計数管、発散および受光側スリット：0.34°、照射野制限マスク（通路幅）：4mm、ゴニオメーター走査範囲(2θ)：10°～160°、ゴニオメーター走査速度：2θ4°/分、記録紙速度：20mm/分、フルスケール：400cps、時定数：2秒。X線回折チャートを第47図に示す。赤色の由来となる主成分鉱物としては赤鉄鉱が同定され、辰砂のピークは認められなかった。

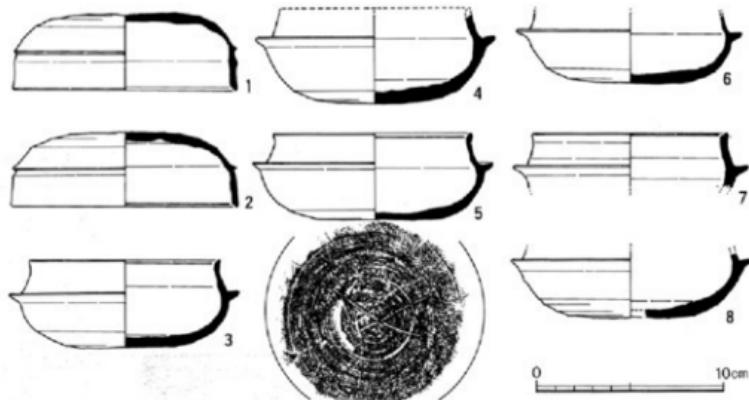
考察

以上の結果から、野間1号墳出土の赤色顔料は赤鉄鉱を主成分とするベンガラであり、少量のパイプ状粒子を含むものであることがわかった。出土赤色顔料のベンガラは、その主成分元素は鉄であってもその鉱物種が赤鉄鉱あるいは褐鉄鉱または両者の混合物であったりする。そのため出土ベンガラは一口にベンガラと言ってもその材質が一様ではなく、その製造・使用方法についてもつかみ所がないのが実状である。今回、野間1号墳出土の赤色顔料が上記のようなベンガラであることがわかり、出土ベンガラを考える上で有効な情報が得られた。また、本古墳での出土状況はいわゆる施朱の意味と終焉を考えるにつき重要であり、類例に期待する。

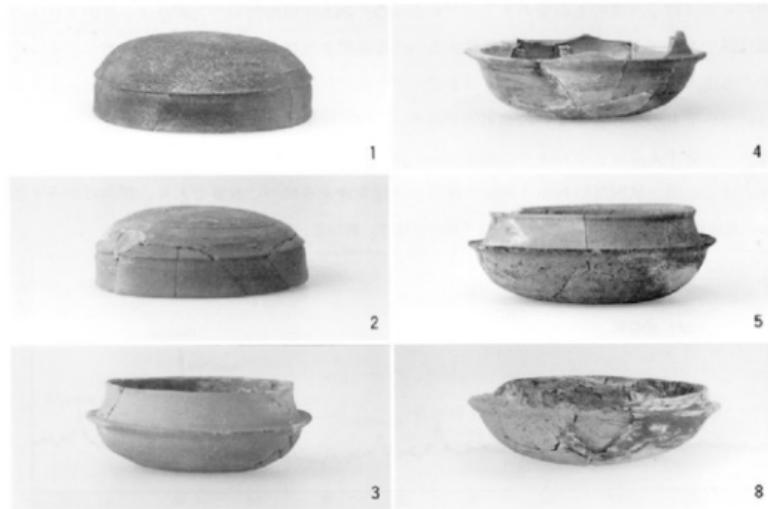
* 見城敏子「古代赤色顔料について」『考古学雑誌』第73巻、第3号、1988



その他の出土遺物 墳丘の西側半分のコンタは、現状では大きな乱れではなく円形に回る。しかし9号トレンチの土層観察によると、墳丘版築は中心より約3.6mで削り取られている。この上に暗茶褐色土が厚く被さっている。この土層より須恵器、土師器が出土した。図示した8点の須恵器は、6世紀初頭頃の時期が考えられ、他の須恵器に比べあまりにも時期差がありすぎる。おそらくは、別の古墳を壊し、暗茶褐色土の中に入り運ばれてきたのであろう。

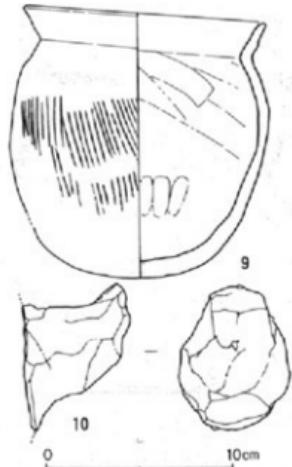


48 3、4区出土の遺物実測図（縮尺1/3）



49 3、4区出土の遺物

須恵器（1～8） 环蓋1、2は、垂直に高い口縁部をもつ。1は口径12cm、器高4.2cm。口縁の高さは2.3cmで器高の約1/2を占める。2の天井部と口縁部の境は、小さく突出して明瞭な稜をつくる。2点とも口縁端内面に段をもち、天井部のヘラ削りは1/2強に及ぶ。ロクロは時計まわりである。环身3～8は环蓋1、2に対応すると思われる。3は口径10.2cm、器高4.7cm、受け部径12.3cm。底部はやや扁平、受け部は水平に突出する。立ち上りは、わずかに内傾しながら伸び、端部は小さく外側に摘み出している。底部のヘラ削りは1/2弱、X字のヘラ記号がある。ロクロは時計まわり。1～6は、割れて破片となっているが、接合するとほぼ完形に近くなる。



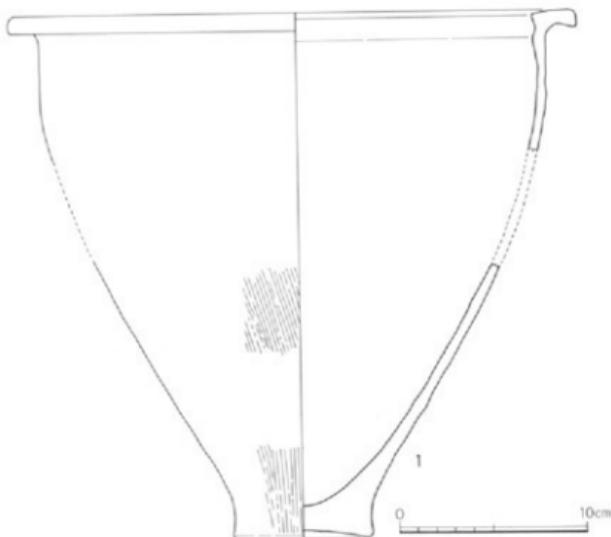
50 3、4区出土の遺物実測図(縮尺1/3)



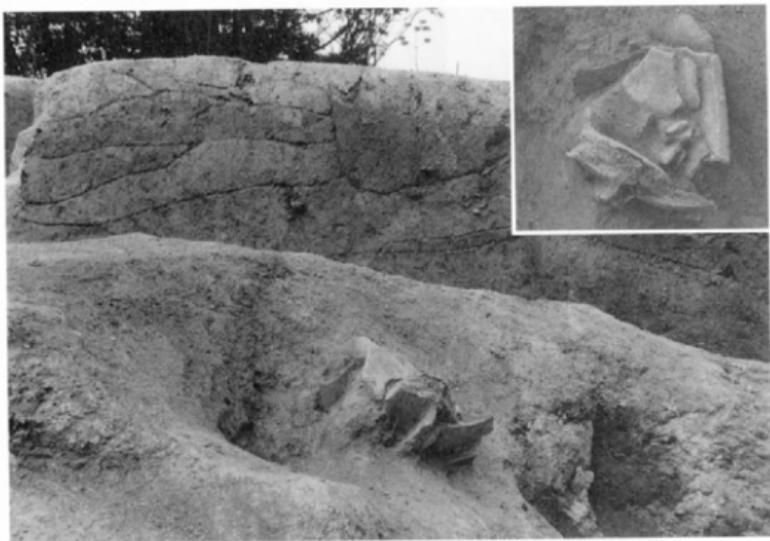
51 3、4区出土の遺物

土師器（9、10） 1号墳より出土する土師器は、きわめて少ない。9は小型の壺、口径12.9cm、器高14cm。丸底の胴部に、直線に外反する口縁部がつく。胴部外面の調整は、粗いハケ目その後に頸部近くのみナデ消されている。内面はヘラ削り。10は瓶の把手。肌色を呈している。

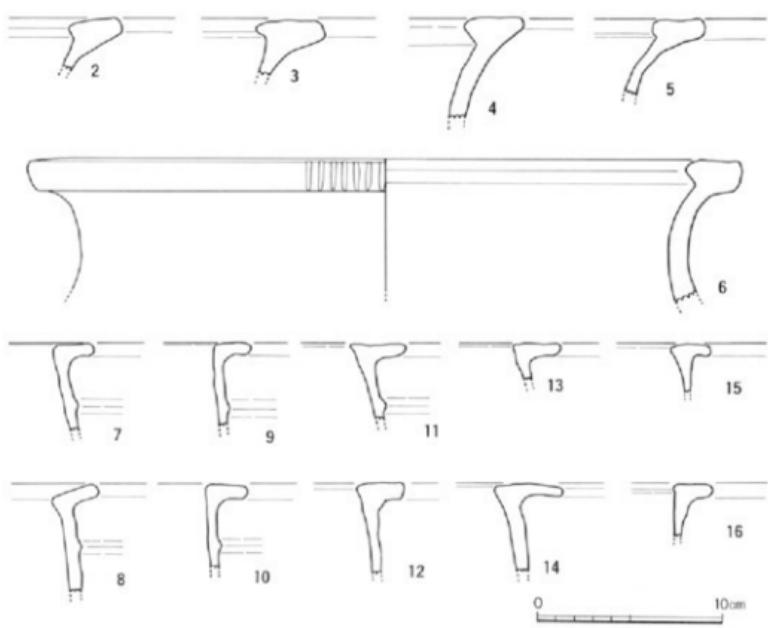
弥生土器（1～27） 挿図30～33は、墳丘の各トレンチや現表土より出土した遺物である。ほとんどは1号墳構築時の盛土の中に、他の場所より移動して来たものであろう。その量は1号墳の須恵器よりも多く、コンテナで10箱を数える。また挿図53のように地山窪地に落ちこんだようなものもあり、弥生時代の生活遺構が近くに存在しているのではないかと推測された。このため、墳丘盛土を除去するとともに、墳丘ばかりではなく対象地全面にわたって精査したが、特別な遺構は検出できなかった。1の壺は、墓道と7号トレンチの間より出土した。胴部が一部接合できないが、一個体分がまとまって出土した。口径30.3cm、底径8.5cm、復原器高27cmを測る。2～6は広口壺の口縁部。6は壺部外面に刻み目がある。7～16は壺の口縁部。いずれも小破片のために、実測図の傾きはやや不正確である。17～23は壺底部、24は壺か。25～27は器台。磨耗が進み器面に砂粒が露出している。28は土製投弾。断面は円形で径2.2cm。



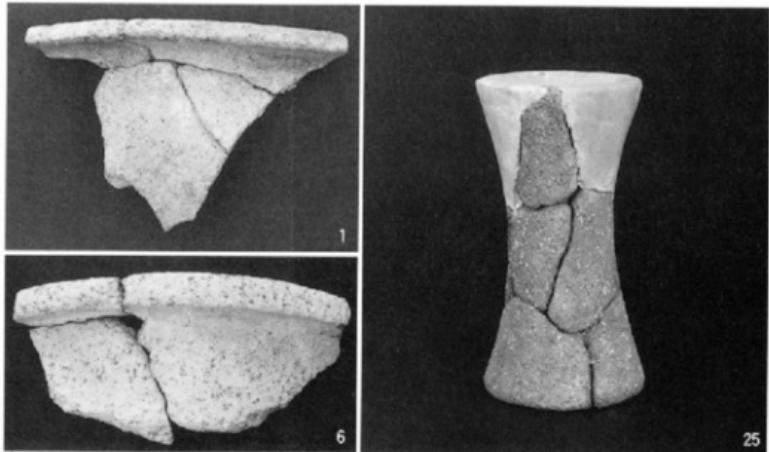
52 銀の実測図（縮尺1/3）



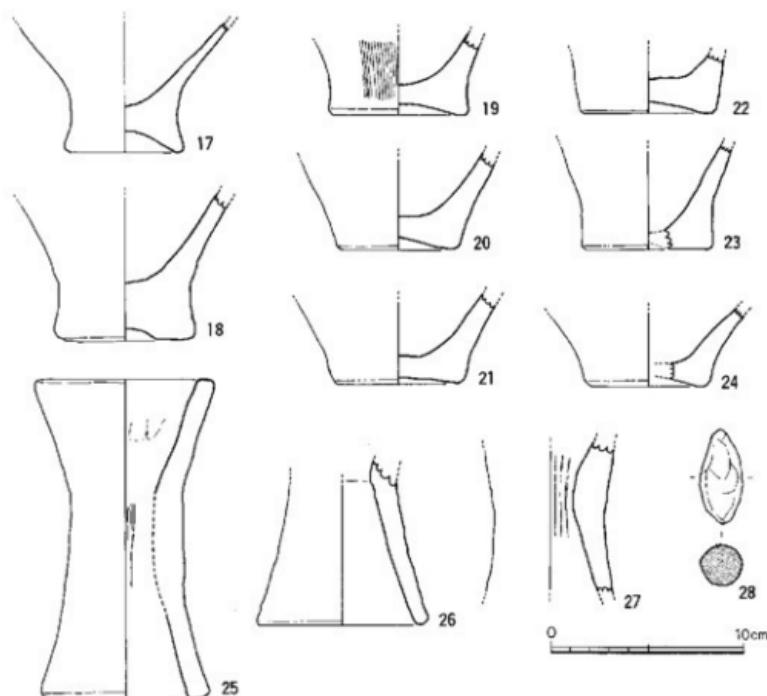
53 銀の出土状況（南西から）正面の壇丘土層は、7号トレンチ。



54 1次調査出土の遺物実測図 (縮尺1/3)

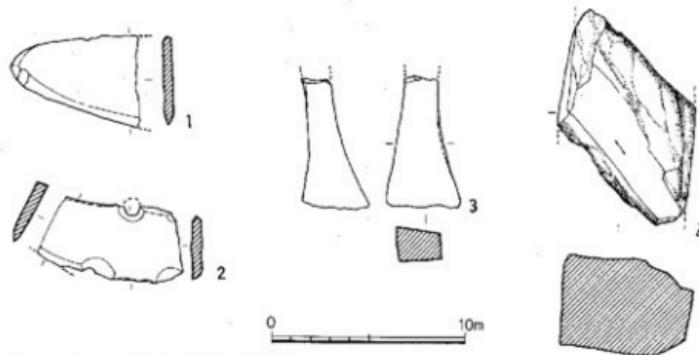


55 1次調査出土の遺物



56 1次調査出土の遺物実測図 (縮尺1/3)

石器 (1~4) 1、2は穂摘具の石包丁。どちらも粘板岩質の石材が用いられている。刃部は両面から研磨されているが、あまり鋭利ではない。2の小孔は径0.7cmを測る。3、4は砥石。どちらもきめの細かい石材で、断面長方形である。全面が砥ぎ面に使用されている。



57 1次調査出土の遺物実測図 (縮尺1/3)

第3章 第2次調査の記録

1. 発掘調査の概要と経過

1次調査を実施した場所は、調査終了とともに右の写真のように道路面まで削平された。隣りの高木松男氏の所有地の北東側、尾根先端部もマンション建設の計画が上ってきたために、ピラミッド状に孤立することになった。高木氏はやむなく造成せざるをえなくなり、残されていた2号墳の発掘調査を福岡市教育委員会に委託された。

1次調査の関係から、常松と力武が再び発掘を担当することになったが、現地は足場が悪く、しかも同時に建設工事も進んでいることから、保護柵などの十分な安全対策を造成業者に依頼した。

2号墳の発掘調査は、10月3日より着手した。調査前の観察では、1号墳のように陥没塙もなく盗掘されていないのではと期待されたが、同じように石材まで抜き取られていた。しかし、墳丘埋葬部の直下に、弥生土器や石器などの遺物を出土する土層が認められた。このため墳丘盛土を完全に移動したところ、古墳築造時の溝と弥生時代の竪穴式住居跡が現われた。住居跡は1軒だけであったが、尾根にはムラが存在している可能性が強くなった。

調査は10月31日に無事終了した。のべ22日の調査期間であった。



58 発掘調査前

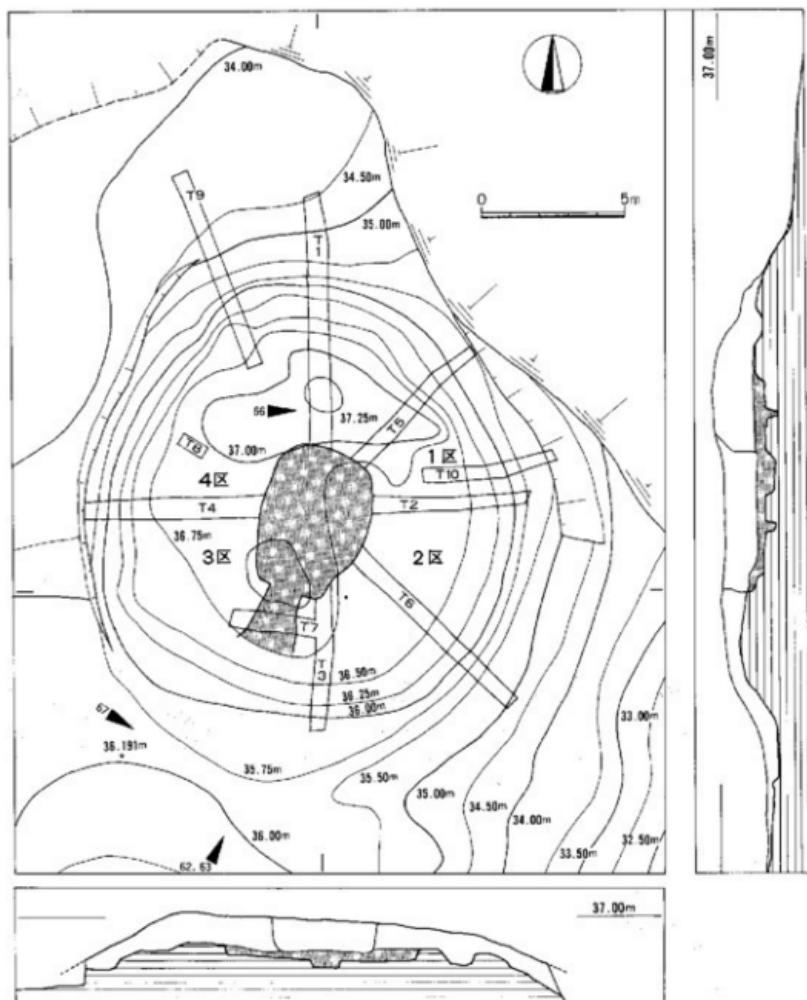


59 発掘調査作業



60 竪穴住居跡の検出作業

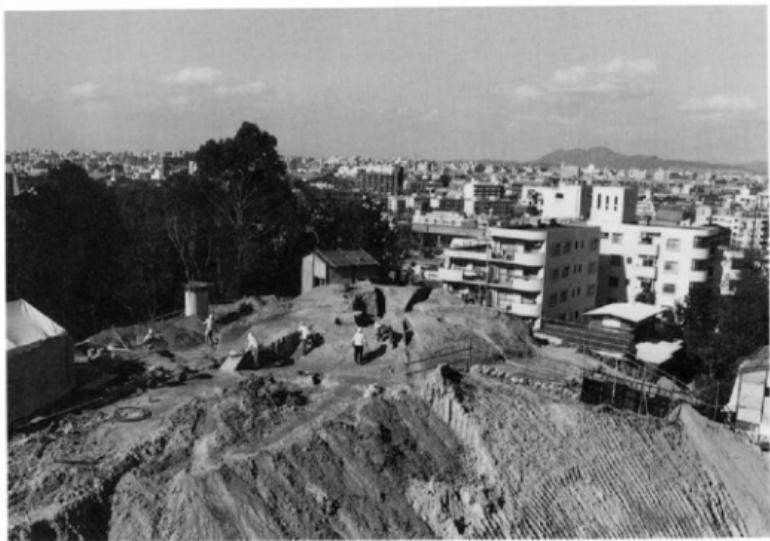
墳丘 2号墳は、1号墳より北東側に約29m離れている。調査前の見かけの大きさは、直径17m、高さ1.5mである。墳頂はやや平坦になっているが、盗掘跡はない。墳頂標高は1号墳より約1m低い。墳丘の東西は、戦前の開墾と道路切通しで削られているものの、全体的に残存状況の良い円墳と思われた。まずトレントを磁北に沿って四方に設定し、北東部より時計ま



61 2号墳トレント配図 (縮尺1/200)



62 2号墳全景（南東から） 発掘着手直後 中央右寄りの山は東区立花山

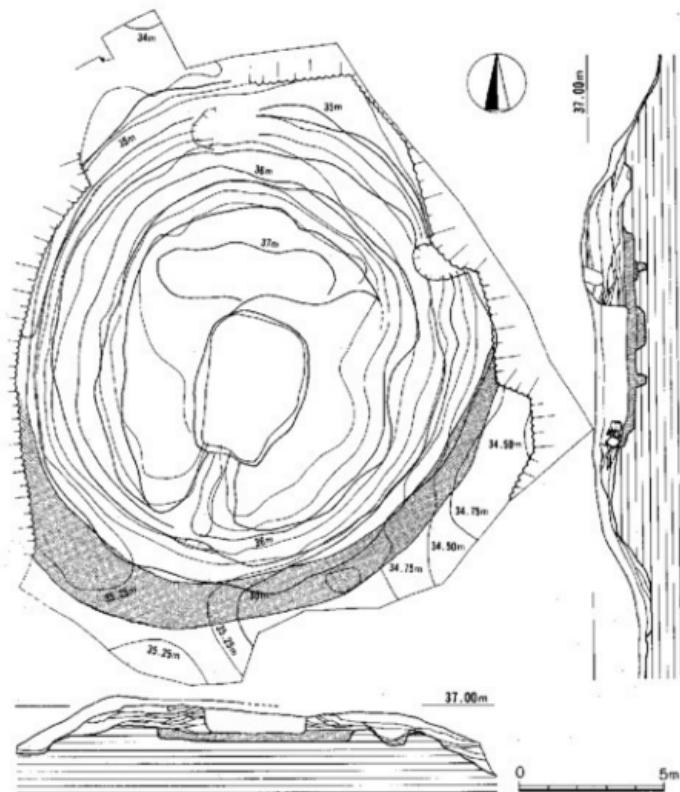


63 2号墳全景（南東から） 発掘途中

すでに1次調査部は、邊界まで削り取られ、発掘作業は非常に危険であった。

わりに1～4区と呼ぶことにした。2号墳は、尾根端部寄りにあるが、墳裾の等高線は尾根の方向とは異なり、北東側に流れていることから前方部の可能性もあり、地山整形と土層の観察には特に注意した。

墳丘は、北側の1、4区がよく残っている。1号トレンチでは、旧表土と思われる水平な黒色土の上に黄茶色土、灰茶色土、灰黑色土を交互に積み重ねて版築している。土層は墳丘中央部近くが薄く、周縁部ほど複雑な版築作業である。中央より北へ8mで盛土はなくなり地山が現われる。地山はこのまま傾斜し、周溝は認められなかった。ただ墳裾部の内側に断面台形の落ち込みがあり、周溝ではないかと想定したが、墳丘盛土が上部に乗っていることから別の遺構と考えられた。同じような落ち込みは、2号トレンチでも見られた。



64 2号墳墳丘測量図（縮尺1/200）



65 2号墳全景（西から） 東和大学の校舎屋上より撮影

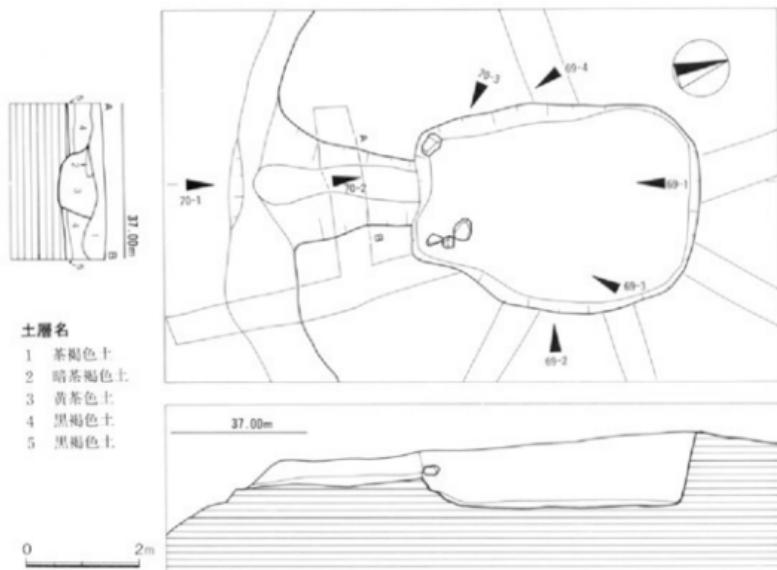


▲66 墳丘盛土（1号トレンチ東壁）

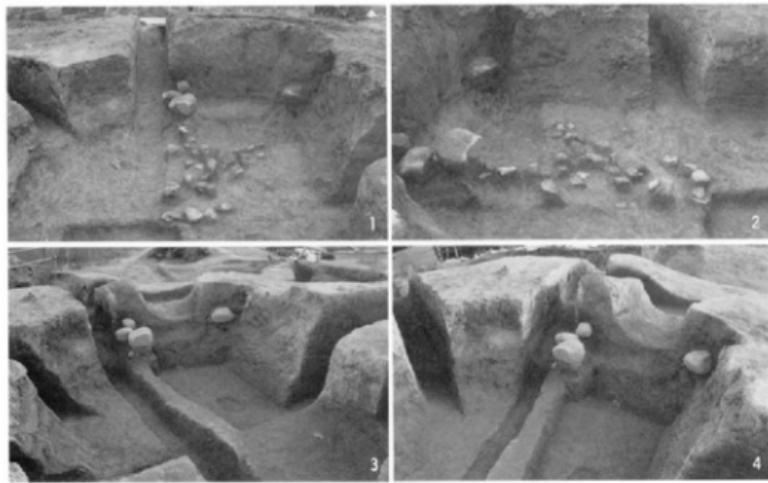
▼67 墳丘裾部（3区）



ちょうど周溝の部分に当るが擾乱を受けて確認できない。



68 盜掘坑 墓道実測図（縮尺1/100）



69 2号墳埋葬部（1、2—床面に小石が散乱している。3、4—住居跡の柱穴が見える。）

周溝は、3、4号トレンチで確認できた。3号トレンチの南端では、幅約2mのゆるやかな落ちこみがあり、明らかに南側の立ち上りも認められる。4号トレンチでは、地山が掘りこまれているものの開墾時に西の立ち上りが削られてその幅を確定できない。各トレンチの土層実測後、現表土を除去し埴丘を出した。周溝は、墓道前面の2、3区で部分的に掘られていた可能性があるものの、これは墓域設定の尾根切断と考え、少くとも全周はしていないようである。

埴丘の大きさは、南北15.5m、東西14mでわずかに南北方向に長い。高さは2.25mを測る。埴丘東側は、そのまま斜面に続いており、平野部から見上げると実際より大きく見えたであろう。

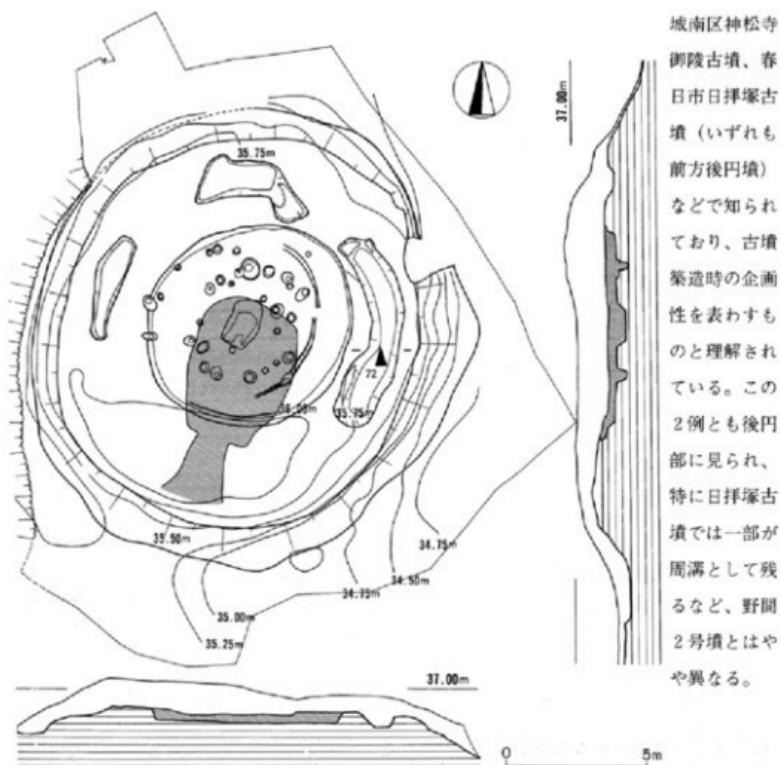
埋葬部 2号墳も完全に破壊されている。盗掘址は、隅丸の不整長方形で長軸5m、短軸3.5mの大きさである。この南西壁には両側に人頭大の石が数個出てきた。東側の石は、3個が積み重ねられており、またこの部分に墓道が付いていることから原位置と考えられる。塙底面には、扁平な小石が散乱していた。この面を底面とすると墓道より約20cm低い。

墓道 南西方向に開く墓道は、埋葬部入口で幅1.15m、長さは3m、深さ約57cmである。断面はゆるやかな鍋底状を呈し、底部はほぼ水平である。土層観察によると、盛土に掘り込まれている。埋土は茶褐色土の1層のみである。中心線の方向はN-19°-Eである。

埴丘下の溝 盛土を完全に除去したところ、挿図71のように南北17m、東西16.5mの正円に近い形で地山整形されていることがわかった。上面は平坦で、この周縁に沿って溝が3か所に掘られている。溝の深さは20~40cmで、明らかに地山整形時に掘られている。このような例は、



70 墓道 (1—埋土除去後 2—墓道断面 3—埋葬部入口)

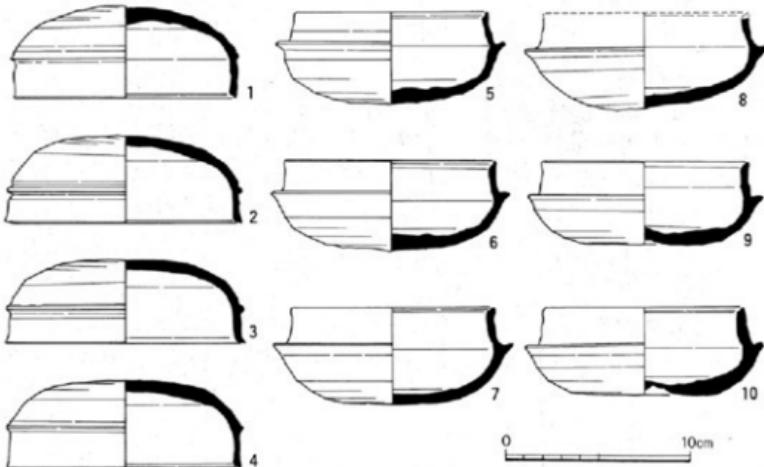


71 塗丘下の溝実測図（縮尺1/200）

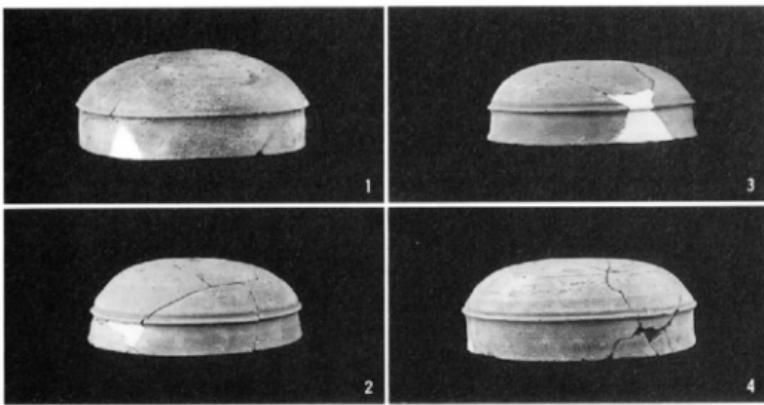
72 塗丘下の溝（2号トレンチ 南から） 途中に黒色土がレンズ状に堆積しており、埴土作業までには時間的な間隔
があつたことがわかる。

出土遺物 埋葬部で原位置を保っている遺物はない。遺物の大半は、墓道前面の墳丘から出土した。これらの中には、追葬あるいは盗掘時に埋葬部より取り出されたものも含まれていると思われるが、区別するのは困難なので一括して図示する。盗掘址の埋土、周溝、盛土より出土した遺物は別にした。1号墳に比べ、盛土より出土する弥生土器はきわめて少なかった。

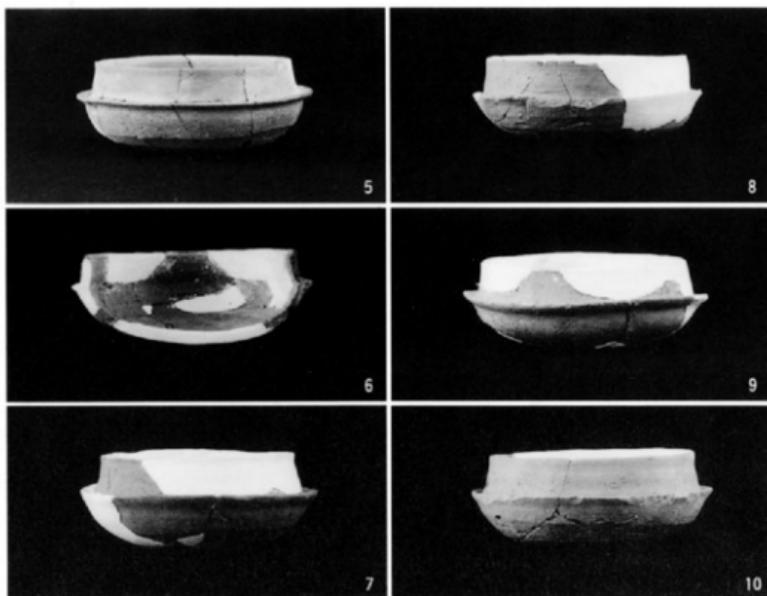
須恵器 墓道前面より出土した須恵器のうち19点が図化できた。この外に大甕の胴部があるが、図示した以外の器種はない。また土師器は含まれていなかった。



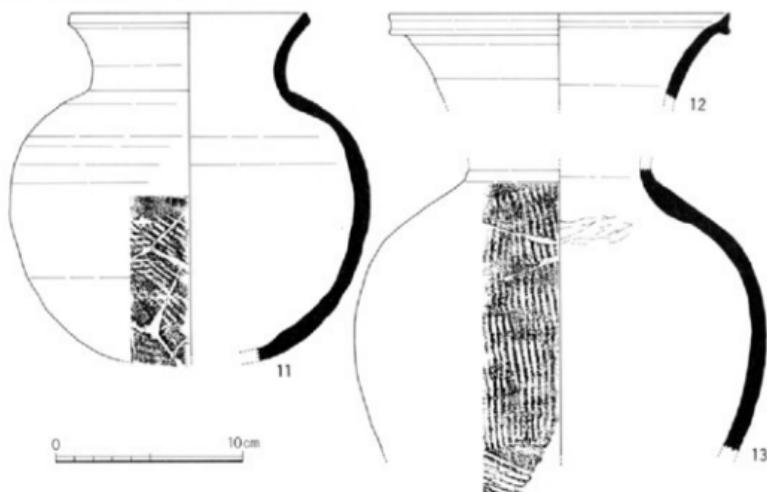
73 2号墳出土の遺物実測図（縮尺1/3）



74 2号墳出土の遺物



75 2号墳出土の遺物

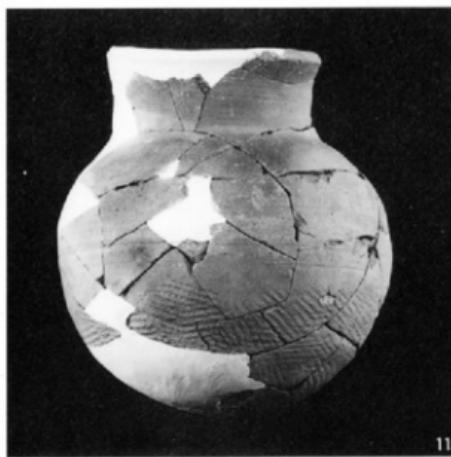


76 2号墳出土の遺物実測図 (縮尺1/3)

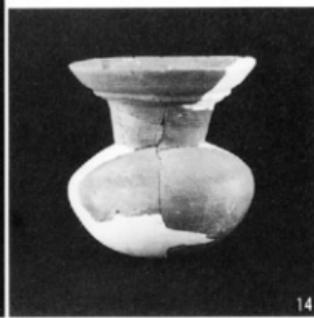
坏蓋（1～4） 坏も他の器種と同じように細かく割れているが、ほぼ接合復原できた。1～4は口径11.8～12.8cm、器高4.4～4.9cmを測る。1は丸みのある天井部で、ヘラ削りは3/4を占める。口縁部との境は、小さく突出し稜をつくる。口縁部は直立し内面にシャープな段をもっている。2～4は、やや天井部の丸みが弱くなる。口縁部との境の稜は、断面蒲鉾状となり特徴的である。口縁端部は、外側に小さく摘み出している。4点とも胎土には小砂粒が入り、調整はあまり丁寧ではない。

坏身（5～10） それぞれ細かな違いはあるが、短かい受け部に内傾する立ち上りが付く。立ち上りは、やや厚いつくりで全体的に鈍重な感じを与える。1は口径10.4cm、器高4.9cm。底部のヘラ削りは1/3強で、ロクロは逆時計回転。立ち上り端部は鋭利なつくりである。6は4区出土の破片と接合した。7の立ち上り端部の段はなくなり内傾するだけである。受け部も上方を向く。8の接合破片も4区9、2区10号トレンチより出土した。胎土には小砂粒が多い。ロクロは時計回転である。9、10の底部は、中央が焼成時にへこむ。立ち上りは垂直に近いが、きわめて厚い器壁である。坏蓋同様に丁寧な調整ではない。

壺（11～13） 11は全体の1/3を欠く。盗掘坑、2、5号トレンチの破片が接合した。球形の胴部下半は、平行叩きを加えている。対応する内面には当て具痕はない。12は口縁部破片で、端部は摘み上げて口唇状となる。13の胴部外面は、底部近くが斜めの平行叩き、上部が喉の平行叩きで、ナデを加えている。



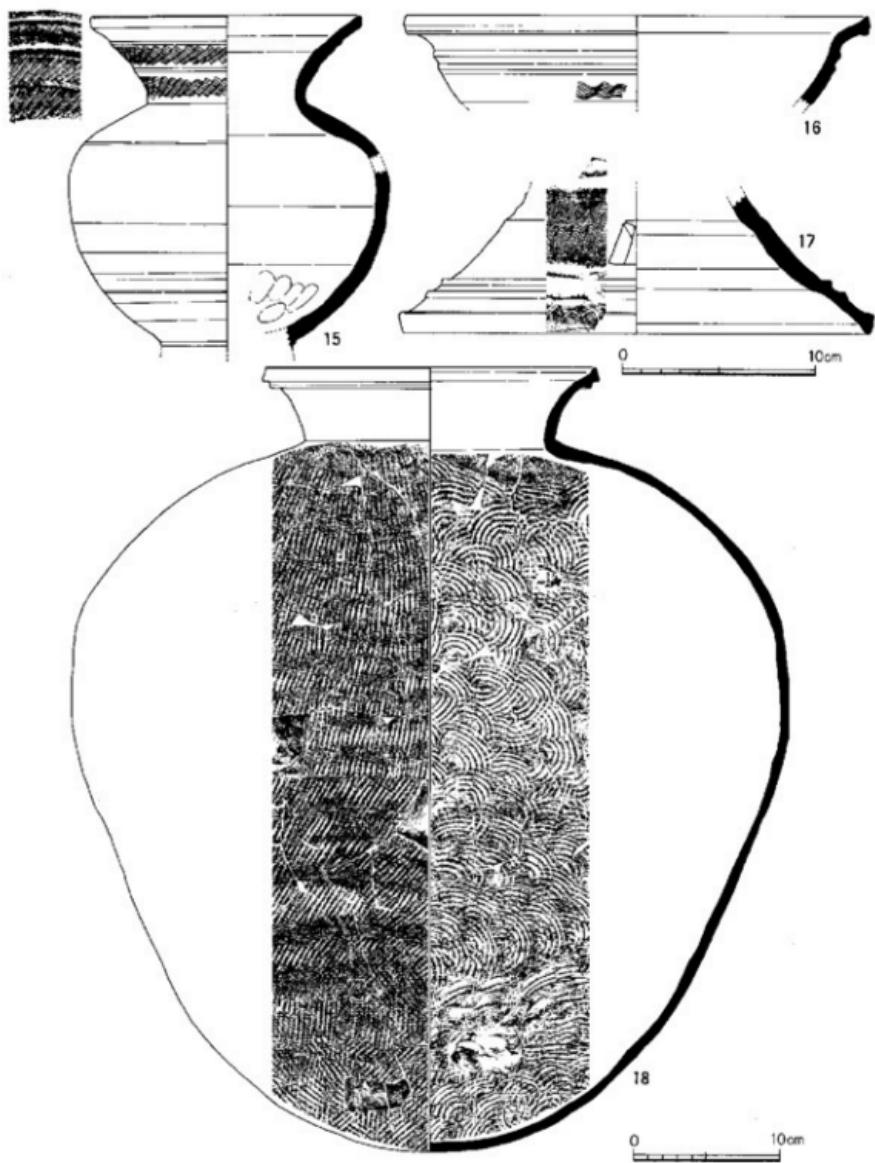
11



14



78 懸念測図（縮尺1/3）



80 2号墳出土の遺物実測図 (縮尺1/3、1/4)

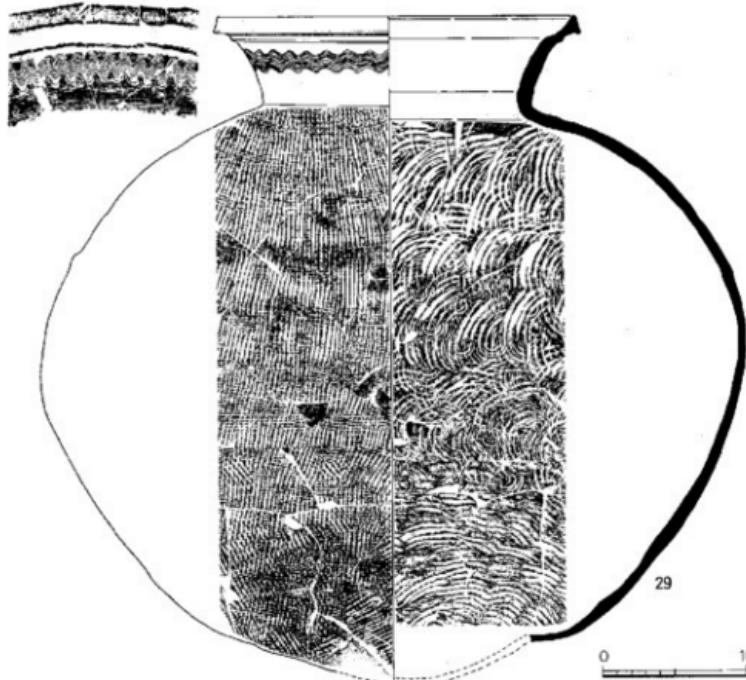
内面の当て具もナデ消されている。胎土、焼成ともよく似ており、同一個体の可能性もある。

埴（14） いま底部と胴小孔部を欠く。濃灰色を呈し焼成は良い。胴部の張りは弱く、底部はわずかに尖り気味。頭部は直線的に伸び、口縁部との境には浅い2条の凹線が巡る。口縁部と頭部に櫛描き波状文、胴肩部に櫛描き列点文を施す。底部外面は平行叩きをナデ消している。口径9.9cm、器高10.5cm、胴部最大径10.2cmを測る。

脚付壺（15） 破片のために胴部が接合できないが、同一個体と考えた。湾曲して外反する口縁部には、2条の凹線があり、上下に櫛描き波状文を巡らす。口径14cm。胴部最大径は16.5cm。脚部を欠いている。胴底部内面は、脚部接合時の指押さえ痕が見られる。

器台（16、17） 环部と脚部の小破片のために同一個体と断定することはできない。脚部は櫛描き波状文の後に上、下2段に台形の透しを開けている。环、脚部とも調整は丁寧である。

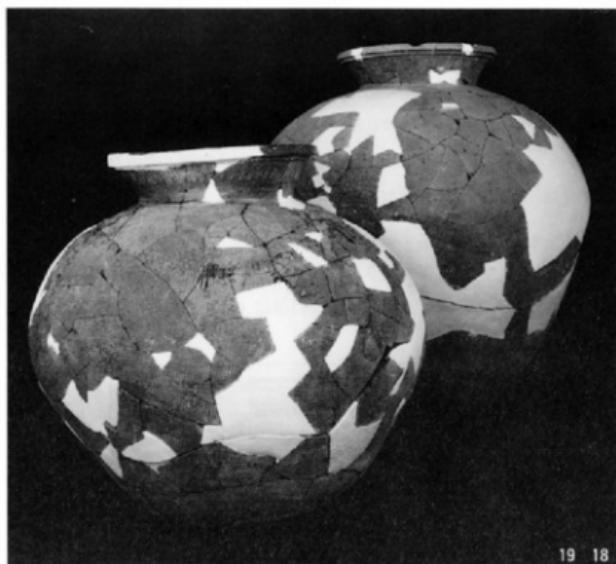
大甕（18、19） 接合復原できたのは2個体であるが、これらと異なる破片があることから、本来は3個体あったと思われる。18は口径22.6cm、胴部最大径48.6cm、器高54cmを測る。胴部



87 壺実測図(縮尺1/4)

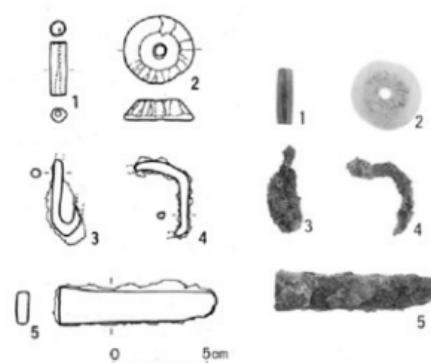
最大径は、中位より上にあり倒卵形をなす。頸部は大きく開き、口縁端部の直下に断面三角形の凸帯を1条巡らす。胴部外面は全面平行叩きで、この上にカキ目を等間隔で加えている。内面には当て具痕の同心円文が残る。19の胴部は中位に最大径を持つ。口縁部には同じように断面三角形の凸帯が巡るが、端部が下方に大きく垂れ、内面も強く横ナデされるなど違いがある。口径も24.6cmと大きい。頸部には櫛搔き波状文を施す。胴部は平行叩きで、さらにカキ目調整を加えている。底部近くに2個の環が焼成時に付着している。

82 瓢



石製品（1、2） 1は盃掘塚の埋土出土。濃緑色の碧玉製管玉である。径9mm、長さ29mm、孔は一方からの穿孔である。他に装饰品は出土していない。2は2区周溝より出土した紡錘車である。径36mm、高さ11mm。たいへん柔かい滑石が使われており、側縁には削り痕が見られる。

鉄製品（3～5） 3点とも墳丘現表土下からの出土なので時期を確定できない。鏽が激しく用途不明。3は刃部がなく、刀子ではない。

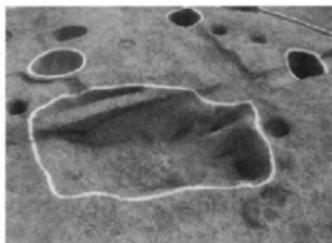


83 石器、鉄製品実測図

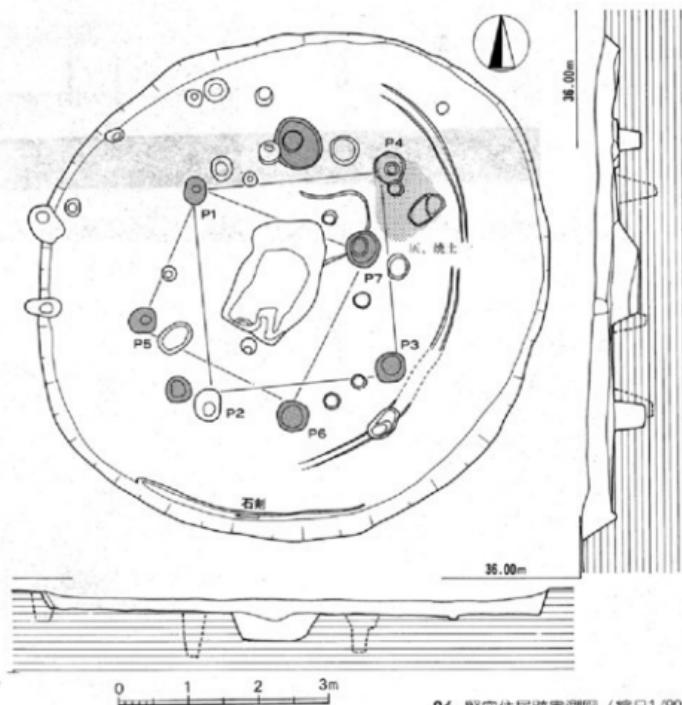
(縮尺1/3)

84 石器、鉄製品

竪穴住居跡 今回の調査地点は、平野部との比高差が20m近くあるにもかかわらず、弥生土器、石製穂摘具などの遺物が多く出土し、稻作に関わる集落が展開しているのではないかと思われた。このため2次調査では弥生時代遺構の検出にも注意を払った。2号墳のトレンチ調査では、墳丘の中心部、径7mにわたって旧表土と地山との間によく縮った淡褐色土が落ちこんでおり、壁は垂直に近く立っていることが観察された。埋葬部直下で竪穴住居跡を検出したことは前述の通りである。竪穴住居跡の平面は長径7.26m、短径7.02mの不整円形である。床面は、わずかに北東方向に傾斜している。中央には炉と思われる不整長方形の穴がある。長軸182cm、短軸114cm、深さ32cm。断面は逆台形に近い。上から茶褐色土、炭化物を多く含む黒色土、淡茶色土がレンズ状に堆積している。



85 中央炉（北西から）



86 竪穴住居跡実測図（縮尺1/80）



87 穹穴住居跡全景（西から） 撮影位置は65と同じ。2号墳の内形に地山整形された中央に住居跡がある。



88 穹穴住居跡の床面（西から） 入口と考えた西壁より裏影。主柱穴と思われる深いビットだけに白線を引いた。

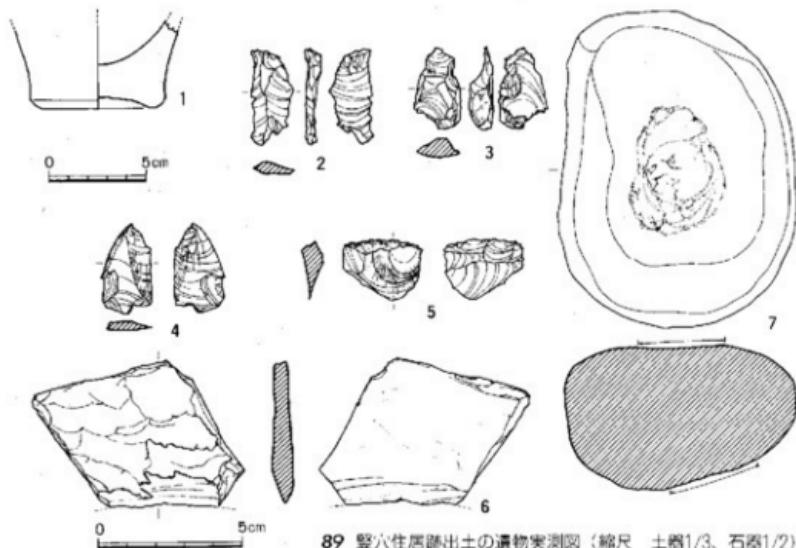
この北東部の床面には、掻き出したと思われる灰と焼土が広がっている。この炉をとり囲むように29個のピットが配されている。このうち壁に掘り込まれた西側のピットは竪穴住居の入口と思われる。間隔は1.2mを測る。壁高は10~40cm前後で、南側ほど高い。壁溝は南側に残る3.4mのみで全周しない。幅約10cm、深さ5cmときわめて浅い。石剣未製品は、この壁溝から出土した。床面の東寄りには、別の溝がある。この溝も壁溝のように浅く、弧状をなすが、途切れている。これを壁溝とすれば、拡張の建て替えを裏付けることになるが、床面のピットは対応して拡散していないようである。物の置き場所など住空間の仕切りか。しかしながらすべてのピットが柱穴として同時に使用されていたとは考えがたい。試みに床面からの深さ38cmを超すピットを主柱穴としてアミをかけた。仮に4本柱とすると、入り口と中心とを結ぶ線に直交するのはP1~4の4本である。また中央炉の長軸に対するのはP4~8である。もちろんこれらをすべて結んだ多角形の柱配置も当然考えられるが、空間利用の制約は大きくなる。

出土遺物 出土遺物はきわめて少ないが、黒曜石の剣片が70点を数え、注意される。

土器（1） 弥生土器の壺底部。わずかに上げ底となる。この他に圓化できなかったが、1次調査出土例と同じようにL字形の口縁部がある。これらのことから竪穴住居跡は中期前半頃を考えた。

石器（2~8） 2~5は黒曜石の剣片でピットより出土した。2には使用痕が認められる。

6は石鎌の破片。砂岩質の石材で、刃部のみが鋭利に研ぎ出されている。住居跡埋土より出土。



89 竪穴住居跡出土の遺物実測図（縮尺 土器1/3、石器1/2）



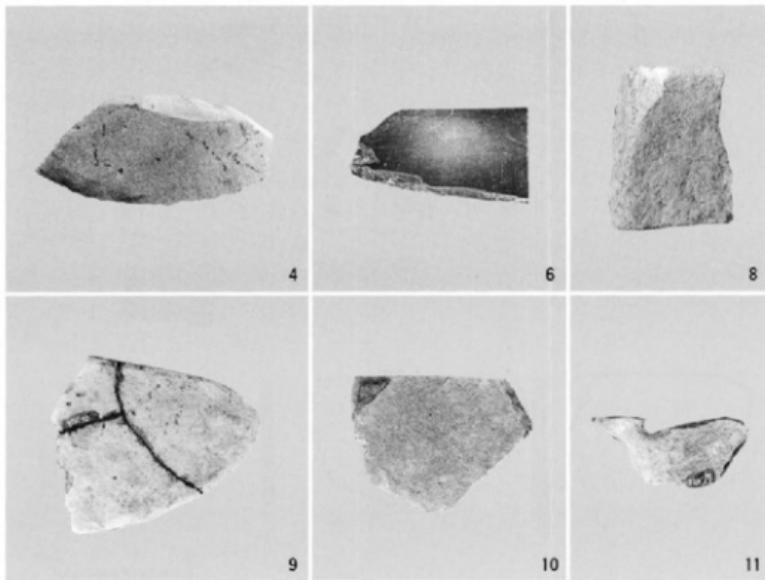
90 石剣未製品の実測図（縮尺1/2）

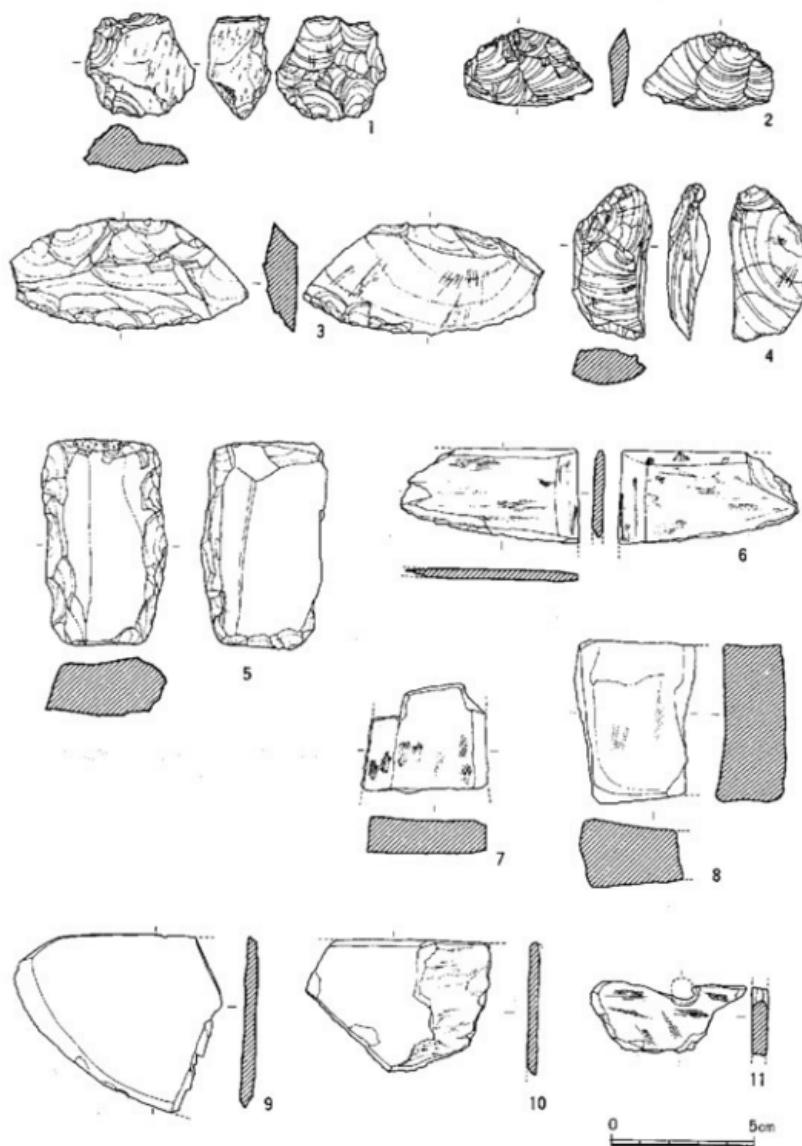


91 石剣未製品

7は埋土より出土した砂岩質の凹石。両面の中央がわずかに窪んでいる。8は壁溝より出土した。灰白色を呈し、長さ31.3cm、基部幅4.9cm。石材は硅質砂岩か。両面ともに素材面を残し、縁部には断続的に潰状痕が見られる。石剣の未製品であろう。

その他の出土遺物 墳丘盛土より出土した石器をまとめた。図化できなかったがこの他に磨製石斧の破片も出土している。黒曜石の剣片数が多くて完成品は皆無である。1~3は黒曜石の剣片。2には使用痕が一部に残る。4はサスカイトの横長剣片で、スクレイバー(搔器)であろう。5~8は砥石。5は両面に砥ぎ面を残しているが、側面は打撃が加えられており、再加工されているようである。粘板岩か。6は緻密な黒色の粘板岩である。厚さ4mm弱の板状で、側縁は幅広く面取りしている。両面ともきわめて丁寧な研磨が加えられており、砥石というよりも別製品を考えるべきか。7は淡赤褐色を呈した砂岩。断面は厚さ11mmの長方形で、全面が砥ぎ面に使われている。8も石材は砂岩。砥ぎ面は1面のみで、わずかに窪んでいる。9~11は穂摘具。9は刃部が丸みをもち半月形に近い。表面は風化が進んでいるが、刃部は両面から砥ぎ出されているのが観察できる。粘板岩か。10は直線の背を残す破片。裏面は完全に剥離している。硬質の粘板岩か。11は小孔部の破片のため、上下は不明。孔は両面穿孔で、表面はよく研磨されている。石材不明。





93 2次調査の遺物の実測図 (縮尺1/2)

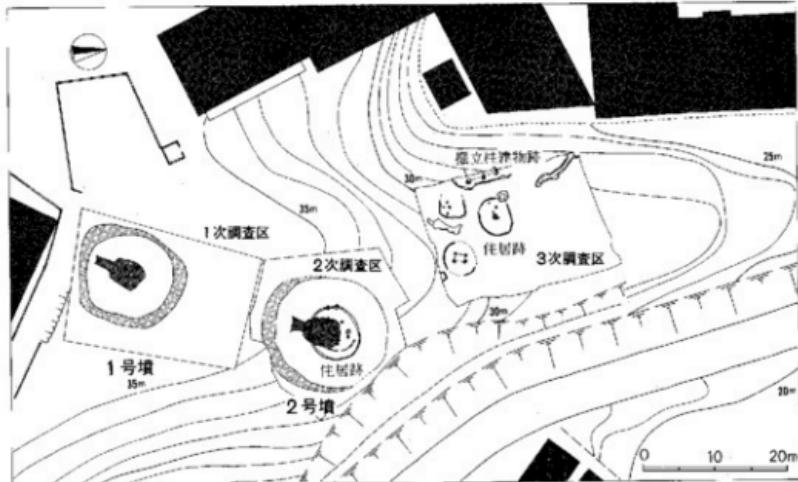
第3章 おわりに

これまで野間B遺跡の2度にわたる発掘調査と、出土遺物の整理結果について記してきた。報告書という本書の目的から、事実の記録をまず優先したので、古墳の被葬者、埋葬部の形態や年代、弥生時代竪穴住居を営んだ人達の生活などについては触れることができなかった。ここでは、いくつかの問題を補足をするとともに、本遺跡の歴史的な変遷について述べてまとめとする。

弥生時代 1次調査では対象地全域の表土を剥ぎ、遺構の検出に努めたが、1号墳のみの調査にとどまった。しかし、墳丘盛土や表土より多くの弥生土器、石器類が出土したことから、盛土は周辺の弥生時代の生活遺構を壊して運び込まれたものと考えられた。もしこの尾根上に生活遺構があったとすると、平野部のムラとの関係や、高燥地における米作り以外の生産活動など、当時の社会情況を知る上で、好資料が得られるのではないかと期待された。

2次調査では、2号墳の直下で、弥生時代中期前半頃の竪穴住居跡が検出され、先の予想を裏付けることができた。

竪穴住居跡は、主柱穴の配置から2回以上の建て替えが考えられるが、出土遺物の示す時期からすれば、長期間使用された形跡はない。1次調査の弥生土器も、同様にあまり時期幅は認められない。竪穴住居跡は、周辺のムラと無関係に存在したわけではないが、わずかに1軒の検出では、その関連を明らかにするのは困難であった。



94 野間B遺跡の遺構配図（縮尺 約1/800）

ところが翌1988年5月に、2次調査区の北東隣接地、尾根先端部の1,400m²が発掘調査されることになった(3次調査)。これで森として残っていた尾根のすべてを完掘したことになる。

3次調査では、1、2次調査の結果と発掘方法の反省を踏まえて、急斜面も調査対象地として精査された。この結果、弥生時代の遺跡として、竪穴住居跡は円形竪穴住居跡2と長方形竪穴住居跡1の計3軒、2間×2間の掘立柱建物跡1棟、土塁1基、住居跡の排水施設と思われる溝1条が検出された。遺物には、中期前半の土器や穂摘具、石鎌、叩石などの石器が出土した。またこの他に縄文土器も出土し、早くからこの森が人間活動の場に利用されていた事がわかった。

2軒の円形竪穴住居跡は、2次調査の竪穴住居跡と同じように中央に長方形の炉を持ち、支柱は4本の構造が考えられる。しかし床面積は約1/2以下しかなく大きな違いが見られる。計4軒の住居跡が同時期に営まれていたかどうかは、出土遺物の細かい比較検討が必要で、本報告書が待たれる。またこの4軒が尾根に展開していた住居跡の総数であったのかは、開発が進んだ今日では確認の方法がない。福岡市内における同時期の遺跡例から見て、ムラを構成する基本的な最小単位と考えていいだろう。ムラによっては、同じような尾根の単位を集合し、大規模なムラを形成していたことも十分に想定できるが、掘立柱建物跡を生産物の貯蔵、保管施設とするならば、この4軒でも生活の完結性を認める事ができよう。

さて、このムラの余剰産物、生活基盤は一体何だったのだろうか。石器類が石包丁や石鎌



95 3次調査の作業風景 すでに1次調査区にはマンションが建設中である。

など穀類の収穫具で構成されていることからすれば、弥生社会の特色である農耕を生業としていたのは間違いない。稻作導入以来の人口増加と耕地不足という問題解消のためにムラは新しい耕地を求めて丘陵、扇状地や山裾へ進出したと言われるが、本遺跡もいわゆる分村現象の一つとして説明、理解できると思われる。しかし、そう簡単に耕地が開墾、獲得できたのであろうか。もちろん水田ばかりではなく、畑作などの分業による分村も当然考えられるものの、谷水田や丘陵、扇状地の開墾や耕作は多くの労働力の投入と指導者なしでは、とうていなしうるものではない。むしろ略奪などの非常手段が、時としては簡単であり、すぐに結果が出る。このような当時の社会情況からして竪穴住居跡より出土した石劍の未製品は重要である。まだ鍛打や研磨の前段階であるが、完成時には30cmを超す長大な鉄劍型の石劍になるのであろう。

石劍は、金属利器の模倣として製作され、その代用品として兜棺墓や土塚墓に副葬されたと理解されてきた。ところが人骨に突き刺さった例が知られるようになり、これをまとめた橋口達也氏は、分村現象が起こる前期後半から中期前半という時期とよく一致することから、各地で耕地と水をめぐっての戦いがあり、石劍は武器として使用されたと発表している。ムラは、反目、戦闘、結合を繰り返し、強力なムラへと発展する。ムラはたえず緊張状態にあり、人々はいつも次の戦闘に備えている。本遺跡の石劍もこのような情況下で、人を殺傷する武器として、またムラを守る道具として準備されたのであろう。しかし、竪穴住居跡に長く住んだ形跡が見られないのは、このムラの結末を暗示しているのであろうか。

古墳時代 弥生時代のムラが絶えてから約500年後、森の腐蝕土に完全に覆われた竪穴住居跡の上に古墳が造られる(2号墳)。この下に竪穴住居跡があることを知っていた分けではなく、小高く尾根が隆起していたからに過ぎない。まず、地山を円錐台形に削り出し基盤を作る。この平坦面に孤状の溝が3条掘られる。類例が二三知られ、埴丘設計のためと説明されている。本遺跡では、同じ面に火を燃やした痕跡が認められることや、溝が、その後の版築作業で埴丘下に姿を隠し、埴丘構策と直接の関係を見出しえないことなどから、作業着工に当たってある種の儀式が行なわれたと推測される。しかも、レンズ状に腐蝕土が落ち込んでいることから、しばらくの間放置されていたことも考えられる。埋葬部の形状については、その掘り方さえも失われているので、まったくの推測に過ぎないが、墓道や6世紀初頭という遺物の年代、盗掘跡より考えられる埋葬部の大きさなどから、竪穴系横口式の石室を想定した。

さらに、6世紀も終わりに近くなつてもう1基の古墳が造られる(2号墳)。墓道両側から出土した須恵器は、一方が破碎され、もう一方は整然と並び置かれている。被葬者のために埋葬時か、あるいはしばらく時間が経過してから埴丘に供えられたものである。また、周溝には、赤色顔料の入った甕が埋置される。赤色顔料は石室の内部に塗られたのであろうか。

1号墳の埋葬部は、2号墳の形状と大きな違いは見出せない。しかし、竪穴系横口式石室は、

6世紀前半で終わると書かれていることからすれば、1号墳は横穴式石室採用後的小石室と考えた方が妥当であろう。

その後、2基の古墳は不幸にも盗掘に会う。副葬品目的の“こそどろ”ではなく、流された橋の補修や土木工事に急に石材が必要になり、村総出で恐る恐る抜き取ったのであろう。盗掘坑の焚き火跡はその罪悪感のお祓いであったとするのは、あまりにも好意的であろうか。

そして現代 この様にして野間B遺跡は、再び森に返った。虫たちは、せわしく羽音を立て飛びかい、木漏れ日のやわらかい光に包まれて地衣類は、さかんに胞子を飛ばす。こんな自然の営みが何年も繰り返されてきました。私達の先祖は、この森に斧を振りおろし、活動領域を拡大しました。弥生時代は団結して生き抜いたムラに、古墳時代は魂の眠る墳墓の地として利用してきました。本道跡は、森との闘いの遺跡と言うことが出来るかもしれません。しかし、自然を完全に破壊し尽くすようなことは決してしていません。自然と調和し、共存することによって自然の恩恵を十分に受けできました。2000年という長い時を超えて遺跡がその姿を留めていたのは、実にこのためです。私達は、この様な遺跡を通して多くの知恵を学ぶことが出来ます。この知恵は後世の人達にも伝えなければいけません。

残念ながら、また貴重な遺跡の一つが、その生命を開発と発掘調査で絶たれてしまいました。

確かに快適な住居生活の獲得は、人間の本能的な欲望です。マンションは、現代社会を象徴する住居遺跡です。この現代の遺跡は、弥生時代の縫穴住居跡のように、2000年という時間に果たして耐えることが出来るのでしょうか。後世の歴史は、現代社会と私達現代人をどのように評価するのでしょうか。

福岡市は、「21世紀につなぐ緑と心豊かな活力の街」を都市づくりの基本理念に掲げています。文化財の発掘調査を担当する私達こそ、過去と未来を繋ぐ重要な立場にあるはずです。本書は、発掘調査の記録に過ぎず、古代人の声と知恵を記録し、未来の人達に伝えるという報告書の本来の目的を果たしていません。今回の発掘調査が、単に遺跡の破壊に終わったことを大いに反省し、肝に銘じたいと思います。

参考 引用文献

- 福岡市教育委員会『三宅寺』 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第50集 1979年
- 高倉洋彰 外『宝台遺跡』 日本住宅公团福岡支所 1970年
- 柳沢一男『整穴系横口式石室再考 一期期横穴式石室の系譜』『古文化論集』 1982年
- 福岡市教育委員会『有田・小田部』第8集 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第155集 1987年
- 福岡県教育委員会『九州縫貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書 X』 1977年
- 須恵町教育委員会『乙植木古墳群 II』 須恵町文化財調査報告書 第2集 1986年
- 宇美町教育委員会『ウツキ遺跡』 宇美町文化財調査報告書 第5集 1986年
- 小田富士雄『九州の須恵器』『世界陶磁全集2』 小学館 1979年

福岡市南区

野間B遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書第211集

©1989年3月31日発行

編集発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目8-15
電話（福岡）711-4667

印刷 セントラル印刷株式会社
福岡市中央区大宮一丁目5-13
電話（092）522-3181

